

令和2年度 学生支援の推進に資する調査研究事業（JASSO リサーチ）  
研究成果報告書

国際バカロレア（IB）履修生に対する進学支援の在り方に関する研究

令和4年2月

研究代表者  
菊地かおり  
筑波大学人間系

共同研究者  
窪田眞二  
常葉大学初等教育高度実践研究科

江幡知佳  
筑波大学大学院人間総合科学研究科博士後期課程  
／立教大学大学教育開発・支援センター

## 目次

<b>調査研究課題の概要</b>	1
<b>1. 序章</b>	2
1-1. 研究目的	2
1-2. 先行研究の検討	2
1-2-1. 海外のIB認定校におけるIB履修生／IB修了生の進路選択過程	2
1-2-2. 日本のIB認定校におけるIB履修生／IB修了生の進路選択過程	3
1-3. 研究課題と研究方法	5
<b>2. 研究課題1：国際バカロレア（IB）修了生調査—進路選択過程—</b>	6
2-1. 調査の概要	6
2-2. インタビュー調査の結果	7
2-2-1. IB修了生が海外／日本の大学進学に至った理由	7
2-2-2. 海外／日本の大学進学を阻害する要因	15
<b>3. 研究課題2：教員調査—進路指導—</b>	19
3-1. 調査の概要	19
3-2. インタビュー調査の結果	19
3-2-1. I校（私立）の事例	19
3-2-2. II校（公立）の事例	21
3-2-3. III校（公立）の事例	22
3-2-4. 各事例の共通点と差異点	23
<b>4. 研究課題3：国際バカロレア（IB）修了生調査—進学後の学習成果—</b>	25
4-1. 調査の概要	25
4-2. インタビュー調査の結果	25
4-2-1. 海外大学進学の場合—IBを通じて育まれた能力やスキルの活用と伸長—	25
4-2-2. 日本の大学進学の場合—IBを通じて育まれた能力やスキルの活用と伸長—	28
<b>5. 終章</b>	32
5-1. 研究成果	32
5-2. 今後の課題	33
<b>引用参考文献</b>	34
<b>資料（アンケート調査単純集計、インタビューガイド等）</b>	35
【巻末資料1：国際バカロレア修了生（大学生）対象アンケート調査単純集計】	35
【巻末資料2：国際バカロレア修了生（大学生）対象インタビューガイド】	40
【巻末資料3：国際バカロレア履修生（高校生）対象インタビューガイド】	42
【巻末資料4：国際バカロレア認定校進路指導担当教員対象インタビューガイド】	44
<b>謝辞</b>	46

## 調査研究課題の概要

**助成事業：**

令和2年度学生支援の推進に資する調査研究事業（JASSO リサーチ）

**研究期間：**

令和2年4月～令和3年6月

**研究課題名：**

国際バカロレア（IB）履修生に対する進学支援の在り方に関する研究

**研究課題名（英語表記）：**

University admission support for students in the International Baccalaureate (IB) programme

**研究代表者：**

菊地かおり（筑波大学人間系）

**共同研究者：**

窪田眞二（常葉大学初等教育高度実践研究科）

江幡知佳（筑波大学大学院人間総合科学研究科博士後期課程／立教大学大学教育開発・支援センター）

## 1. 序章

### 1-1. 研究目的

本調査研究の目的は、国際バカロレア（International Baccalaureate、以下IB）を履修している高校生（以下、IB履修生）に対する望ましい進学支援の在り方を検討することである。

2010年代以降、日本においては、教育をグローバル化に対応させるため<sup>1</sup>、国際バカロレア（IB）の普及・拡大が図られてきた。IBとは、全人的な発達や高等教育への準備、国際理解等を重視する後期中等教育プログラムであり<sup>2</sup>、そのプログラムの履修・修了により、生徒は世界の約2,000の大学が認知している<sup>3</sup>IB修了証（IB Diploma）を取得できる。2013年当時、文部科学省大臣官房国際課長の永山は、IB認定校<sup>4</sup>を増加させる3つの理由として、①世界で活躍する人材育成、②人材流動性の向上、および③高校カリキュラムへの波及効果を挙げ、特に②人材流動性の向上に関して、インバウンドの効果、つまり海外からの学生の獲得と、アウトバウンドの効果、つまり高校生の海外への送り出しが期待されるとした（永山 2013）。

だが、このIBの普及・拡大に対する期待は、必ずしも果たされるわけではない。当然のことではあるが、例えば日本人が海外でIB修了証を取得したとしても、「帰国生」として日本の大学に進学するとは限らず、また、日本でIB修了証を取得した生徒がみな、海外大学に進学するとは限らないからである。事実、結論を一部先取りするかたちになるが、筆者らが実施した調査結果に基づけば、海外でIB修了証を取得したもののなかには、後期中等教育課程在学中に、進路希望を日本の大学から海外大学に変更したものが存在し（逆もまた存在する）、かつ、日本でIB修了証を取得したもののなかには、進路希望を海外大学から日本の大学に変更したものが存在している。

こうした進路希望の変更はなぜ生じているのだろうか。その変更の背後には、海外／日本の大学への進学に伴う、何らかの困難があるのではないか。もしそうであるならば、その困難を減らすための支援とは、いかなるものか。

これらの疑問に答える先行研究は、管見の限り乏しい。節を改めて、先行研究の検討を行う。

### 1-2. 先行研究の検討

本節では、（1）海外のIB認定校出身のIB修了生、（2）日本のIB認定校出身のIB修了生の進路選択過程に関する先行研究を整理する。

#### 1-2-1. 海外のIB認定校におけるIB履修生／IB修了生の進路選択過程

海外のIB認定校におけるIB履修生／IB修了生の進路選択を扱った先行研究として、岩崎による「在学生調査」（岩崎 2007a）と「大学との接続調査」（岩崎 2007b）が挙げられる。

---

<sup>1</sup> 例えば、「日本再興戦略-JAPAN is BACK-」（2013年6月閣議決定）において、「グローバル化に対応した教育を牽引する学校群の形成」のために、「一部日本語による国際バカロレアの教育プログラムの開発・導入等を通じ、国際バカロレア認定校等の大幅な増加を目指す」と述べられた。

<sup>2</sup> 本稿では記述の煩雑さを回避するために、「IB」の語を用いて、IBディプロマプログラム（IB Diploma Programme）を指すこととする。なお、IBのカリキュラムの詳細等については岩崎（2018）を参照されたい。

<sup>3</sup> International Baccalaureate. “Developing a recognition policy” (<https://www.ibo.org/university-admission/benefits-to-universities-and-colleges-of-accepting-ib-students/developing-a-recognition-policy/>, 2021.1.20.)

<sup>4</sup> IBプログラムの実施を、IB機構（IB本部）より認可された学校を指す。

「在学生調査」では、アムステルダム国際学校、デュッセルドルフ国際学校、パリ国際学校の在學生と卒業生を対象として、質問紙調査および面接調査が実施され、進路との関連で以下のことが言及されている。質問紙回答者 56 名中、日本の大学進学者は 44 名、外国の大学進学者は 12 名であり、外国の大学進学者の多くは、幼少期にアメリカやフランスの現地校に通ったもので、実学・技術向上目的の進学（工学、フルーツ、バレエなど）が多い。国立大学を志望するものの特徴は、父親、もしくは両親が国立大学出身者ということにある。進路選択は、教員の進路指導（パリ）、現地の塾（デュッセルドルフ、アムステルダム）や先輩、保護者からの情報に依拠している（岩崎 2007a）。

「大学との接続調査」の内容と、調査結果に基づく IB 修了生の進路に関する言及は以下のとおりである。「大学との接続調査」では、①IB 科目のうち第一言語で日本語クラスをもっている国際学校（IB 認定校）を対象に実施された質問紙調査と面談聴取、ならびに、②当該国際学校の日本語教諭から IB を理解していると認識されていた慶應義塾大学湘南藤沢キャンパス（SFC）、国際基督教大学、およびユナイテッド・ワールド・カレッジ（UWC）卒業生の受け入れ実績をもつ京都大学法学部・経済学部のいずれかに在学中の IB 修了生を対象にした、自由記述式の質問紙調査が実施された。調査結果として、例えばパリ国際学校において、日本人生徒の多くは進学先として日本の大学を選択することが明らかにされた。なぜなら、保護者の多くが、卒業後日本の企業で働くためには、日本の大学に入学することが必要との意識をもつためである。パリ国際学校やミュンヘン国際学校において、日本人生徒は日本の国立大学ではなく私立大学を選択する傾向にある。その理由は、私立大学は転学部などが可能でカリキュラムが柔軟、選択科目が多い、対して国立大学は、施設が古くカリキュラムの柔軟性に欠ける、帰国子女入学者に転学部が認められないといった認識をもたれているからである（岩崎 2007b）。また、調査結果から、日本の大学の教育内容に対して「その教育内容の劣悪な評判」という表現を用いながらも、「過去の消化と未来に向けた充電」のために日本の大学への進学を選択した IB 修了生の存在も確認できる（岩崎 2007b: 114）。

## 1-2-2. 日本の IB 認定校における IB 履修生／IB 修了生の進路選択過程

日本の IB 認定校<sup>5</sup>における IB 履修生の進路選択（IB 認定校への進学理由および卒業後の大学選択の理由）を扱った先行研究として、渋谷（2016）による研究がある。渋谷によると、IB 履修生は、(1)英語圏の大学への進学を希望するから、(2)海外大学への進学を希望するわけではないが、（高校において）英語で教育を受けることを希望するから、(3)「従来型の学び」ではなく IB の教育が好きだから、以上 3 つの理由のいずれかに基づき、IB の履修を選択する。そして、大学への進路選択に際しては、海外大学を希望する場合に大きな経済的障壁が立ちほだかること、および、治安や人種差別、学生文化の違い等から海外大学への進学を敬遠する家庭があることが指摘されている。加えて、日本の大学を希望する場合、「IB を活用した特別入試」のみならず、AO 入試や推薦入試等、多様な特別入試を IB 履修生が利用していることが示されている（渋谷 2016）。渋谷による研究は、「IB に先進的に取り組む日本の学校での聞き取り調査を踏まえて、IB をめぐる高大接続について、当事者達の経験や考えを明らか」（渋谷 2016: 43）にすることを試みており、本調査研究にとって重要な先行研究に位置づくと言える。

だが、これまでの高校教育研究において重要視されてきた、進路選択を過程としてみる視点（例えば、総合学科を対象とした三戸（2001）が試みたような視点）を参考にすると、新たに見えてくる IB 履修生／修了生の進路選択過程の内実があるように思われる。渋谷は、「現に、進学先を国内か国外か決めかねている生徒は複数いたし、最終的に進学先を

---

<sup>5</sup> 本稿で日本の IB 認定校とは、学校教育法第 1 条に規定されている学校であり、かつ IB 機構（IB 本部）から認定されている学校を指す。

変更した生徒もいた」(渋谷 2016: 429)と述べているが、その変更の背後にはいかなる要因があるのかを問うということである。本調査研究では、パネル調査の方法を採用できるわけではないが、進路選択を終えたIB修了生に高校時代(場合によっては、それ以前も含む)を振り返ってもらうことにより、より通時的に、進路選択過程を描くことを試みる。

参考になる知見として、小林(2019)の研究を参照すると、英語圏の大学への進学を希望してIBの履修を選択したとしても、最終的に英語圏の大学への進学という行動に至るとは限らないことが示唆される。小林によると、日本人の高校生が卒業後の進路として海外大学への進学を検討する際には、①そもそも海外大学が進路希望の選択肢に入るかどうかという分岐点があり、②その後進学先の候補について要求される語学力や成績水準、費用等を踏まえて比較検討し、③最終的に出願先を決定して留学が現実的になる、という過程をたどる。そして、最初の分岐点で海外大学への進学を希望したとしても、最終的に海外大学への進学が現実のものになるとは限らない。

このような進路希望の変更はなぜ起こるのか。この点に関する知見は乏しいが<sup>6</sup>、小林(2019: 25)は、「高校生活の前半時点で海外の大学を志望しながらも最終的には国内の大学へと進学した層は(中略)海外で学位を取得するために長期間日本を不在にする長期留学よりも、日本国内の大学に進学した後に語学研修や交換留学等の制度を利用して短期留学を実践することにより、『グローバルな文化資本』と『ローカルな文化資本』の両方を獲得する」という合理性を求めているのではないかと、ということ仮説的に提示している。

同様の指摘、すなわち日本の大学において1年程度の留学をバックアップする体制が整備されていることが、海外大学への進学を阻害する要因になっているという指摘は、他の研究でもされている(高崎 2013)。つまり、海外大学への進学が実現するまでの過程に内包される障害(語学力、費用等)や日本の大学のグローバル化を背景要因として、日本の大学へ進学し、そのうえで海外経験をしようという進路希望を生徒が抱く傾向が強まっている可能性がある。

他方、日本の大学に進学する場合にも、進路選択の過程が単純であるとは限らない。IB履修生が日本の大学に進学する場合には、上記のとおり(1)「国際バカロレア特別入試」等の名称で実施されている、IB修了生のみを対象とした入試、あるいは(2)AO入試や推薦入試という経路を経る場合が大半である。日本のIB認定校をIB履修生が卒業する場合に彼らはIB修了証に加えて日本の高校卒業資格を取得するため、(3)一般入試の経路も論理的には考えられる。しかし「IBとセンター試験とはまったく異質で、両立は内容的にも時期的にもほぼ不可能」(渋谷 2016: 47)であるゆえに、IB修了生による一般入試を経た進学という行動は現実的にはほとんど確認されないと考えてよいだろう。すなわちIB修了生は、一般入試ではなく特別入試を受験することになるわけであるが、特別入試と一口に言っても、「入試の多様化」(リクルート 2009)という言葉に象徴されるように、実施方法や実施時期は各大学によって大きく異なる。各大学、学部・学科によって多様な入試が実施されているなかで、日本の大学に進学を希望するIB修了生は、いかなる過程で進路を選択しているのだろうか。

総括すると、IB履修生/IB修了生の進路選択を過程としてみた場合には、進学支援制度や入試制度、それらを踏まえた教員による進路指導、そしてIBカリキュラムとIB履修生/IB修了生の内的な世界とが、複雑に絡みあっているはずである。にもかかわらず、上記のとおりその過程を解明する研究は十分に行われてきたとは言えない。

---

<sup>6</sup> この点に関して、小林は、「SES (Socio-economic Status : 社会経済的地位) や学力といった独立変数は、留学希望者が進路を変更した要因ではないと言える」(小林 2019: 24、丸括弧内は引用者による補足)と述べている。

### 1-3. 研究課題と研究方法

前節の先行研究の検討を踏まえて、以下のとおり、研究課題を設定する。

研究課題 1：IB 修了生は、①なぜ、海外／日本の大学への進学を希望するに至ったのか、②海外／日本の大学への進学を阻害する要因があるとすれば、それは何かを明らかにする（第 2 章に対応）。

研究方法：IB 修了生を対象として、進路選択の過程に関するアンケート調査およびインタビュー調査をオンラインで実施する。アンケート調査は Google Form、インタビュー調査は Zoom を用いる。

研究課題 2：日本の IB 認定校では、いかなる進路指導が行われているのかを明らかにする（第 3 章に対応）。

研究方法：日本の IB 認定校の進路指導担当教員へのインタビュー調査をオンラインで実施する。インタビュー調査は Zoom を用いる。

研究課題 3：海外／日本の大学へ進学後、IB 修了生は、IB を通じて育まれた能力やスキルをいかに活用しているか／伸ばしているかを明らかにする（第 4 章に対応）。

研究方法：IB 認定校を卒業後に海外／日本の大学に進学した IB 修了生を対象としてインタビュー調査をオンラインで実施する。インタビュー調査は Zoom を用いる。

研究課題 3 について補足する。IB に関する日本の先行研究を参照すると、IB を通じていかなる能力やスキルが育まれるかについては一部論じられている。しかし、IB 修了生は、IB を通じて育まれた能力やスキルを大学進学後にいかに活用しているか／伸ばしているかという点に関しては、知見の蓄積が乏しい。例えば、岩崎は、「IB を受講することで、獲得される資質・能力は、非常に高度」であり、IB を通じて「課題設定、問題解決、文章化、プレゼンテーション能力が培われ、複眼的思考が訓練される。さらに英語で課題をこなすため、英語の専門用語を覚えることになる」（岩崎 2018: 317）と述べている。では、それらの「資質・能力」は、海外／日本の大学教育において、あるいは、さまざまな学問分野（専攻）において、一様に活用されるものか／伸ばされるものか。こうした疑問に対して知見を提供することは、IB 履修生／IB 修了生の進学を考えるうえで重要であると考え、研究課題 3 を設定した。

また、本調査研究は、筑波大学人間系研究倫理委員会の審査を経た上で実施された（課題番号 筑 2020-108 号）。

本稿の第 1 章および第 2 章については、研究経過報告書（2021 年 2 月）に、内容を変えない範囲で修正を加えた。

また、本稿の第 2 章で引用しているデータを用いて、以下の論文を執筆した。江幡知佳（2022a）「国際バカロレア修了生の進路選択に関する探索的研究—海外大学／日本の大学をめぐる選択に着目して—」『九州大学教育社会学研究集録』（23）、印刷中（2022 年 3 月刊行予定）。

また、当初、国際バカロレア履修生（高校生）対象のインタビュー調査の実施を企画していたが、新型コロナウイルスの感染症拡大の影響などにより、十分な調査実施には至らなかった。しかし、IB 認定校 1 校において、2021 年 3～4 月時点で高校を卒業した生徒／大学等に入学したばかりであった学生にインタビュー調査を実施できた。その成果については、本稿に記載していないが、以下の論文で公表した。江幡知佳（2022b）「地方 X 校における国際バカロレア（IB）修了生の進路選択に関する研究—ローカリズムを視点として—」『筑波大学教育学系論集』46(2)、印刷中（2022 年 3 月刊行予定）。

## 2. 研究課題 1：国際バカロレア（IB）修了生調査—進路選択過程—

### 2-1. 調査の概要

本章では、研究課題 1 について検討する。

研究課題 1：IB 修了生は、①なぜ、海外／日本の大学への進学を希望するに至ったのか、②海外／日本の大学への進学を阻害する要因があるとするれば、それは何か。

手法として、(1)サンプリングのためのアンケート調査、加えてその後、(2)半構造化インタビューを実施した<sup>7</sup>。そのような手順を踏むこととした理由は、以下による。本稿の考察の対象となる IB 修了生の進路選択の過程を類型化すると、以下の図 1 に示すように 8 つのパターンが見られるはずであり、各パターンへの布置に基づき、インタビュー者を選定することが必要と考えたためである。

アンケート調査の概要を述べる。出身の IB 認定校が海外か日本か<sup>8</sup>、現在海外大学に在学しているか、日本の大学に在学しているか、後期中等教育課程在学中に一貫して海外／日本の大学への進学を希望していたか、進路希望の変更があったか等を、オンラインアンケートフォーム（Google Form）を用いて IB 修了生にたずねた。結果として、38 件の回答を得られた（単純集計の結果は、巻末資料 1 を参照）。回答の布置は図 2 のとおりである（なお、番号は回答された順を、番号の上の取り消し線はインタビュー調査への協力が不可であることを指す）<sup>9</sup>。

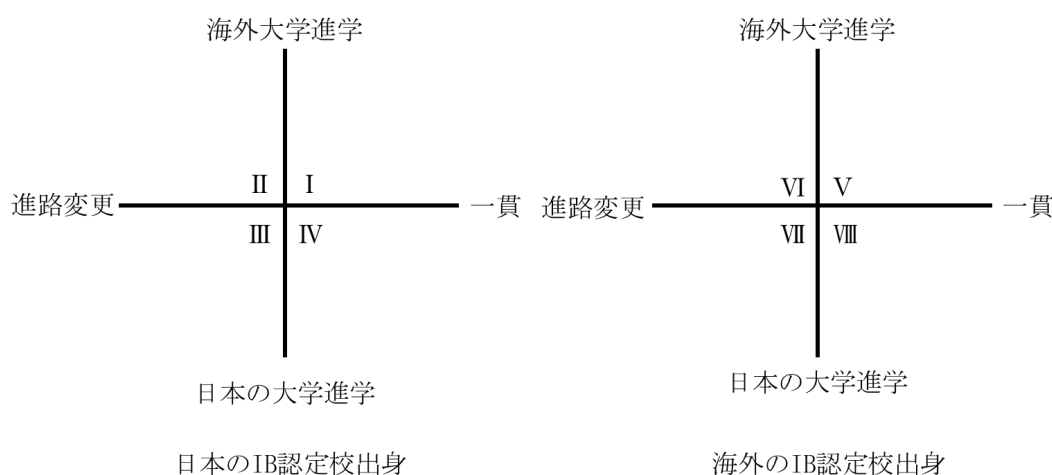


図1 「国際バカロレア修了生調査」におけるIB修了生の進路選択過程のパターン

※「進路変更」は、「あなたは高校入学時から高校卒業時にかけて、進路希望に変更がありましたか」というアンケートの質問に対して、「日本の大学への進学を希望していたが、海外の大学への進学を希望するようになった」あるいは「海外の大学への進学を希望していたが、日本の大学への進学を希望するようになった」を選択したことを指す。

出典：筆者作成

<sup>7</sup> このような方法は、混合研究法の説明的デザイン：参加者選定モデルと呼ばれる（クラスウェル・プラノクラーク 2010）。

<sup>8</sup> 海外の IB 認定校には「海外のインターナショナルスクール」と「海外の現地校」が、日本の IB 認定校には「日本の高校（公立）」、「日本の高校（私立）」、および「日本国内のインターナショナルスクール」が含まれる。

<sup>9</sup> 回答②の IB 修了生は、「あなたは高校入学時から高校卒業時にかけて、進路希望に変更がありましたか」という問いに対して、「高校入学時は何も考えていなかった」と回答したが、一貫した進路希望を抱いていたと本人が認識していないという点で、「一貫」でな



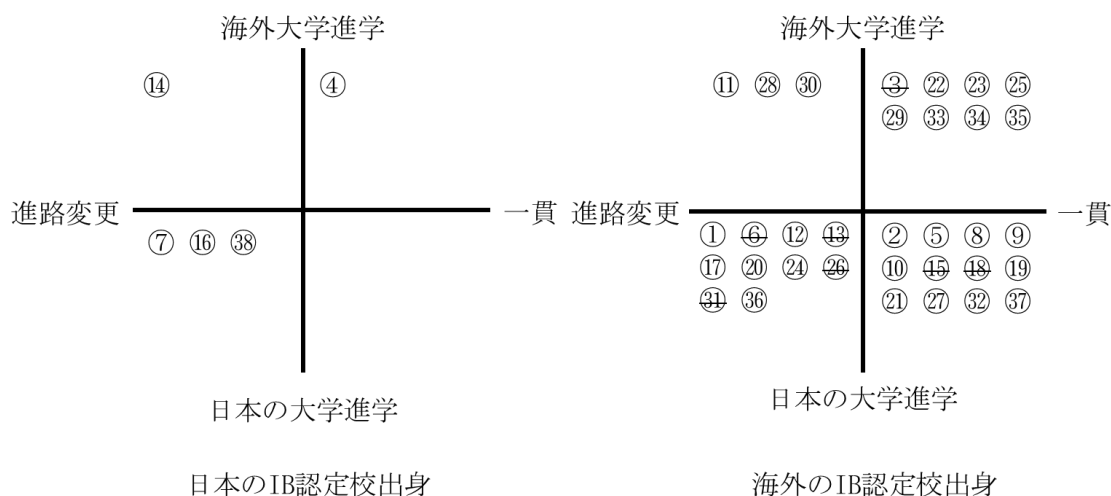


図2 アンケート調査への回答に基づくIB修了生の進路選択過程の布置

出典：筆者作成

アンケート回答者 38 名のうち、インタビュー調査への協力意思があったとしたのは 31 名であった。当該 31 名のうち、図 2 を参照しながら、以下の観点でインタビュー調査への協力を依頼した。すなわち、進路希望の変更を経験したとする 13 名の回答者（象限Ⅱ、Ⅲ、Ⅵ、Ⅶに布置）については、海外／日本の大学への進学をめぐる何らかの困難を経験した可能性が高いものとして、全員に対し、協力を依頼した。加えて、比較対象として、象限Ⅰに布置する回答者 1 名、象限Ⅴに布置する回答者のうちの 4 名、象限Ⅷに布置する回答者のうちの 4 名に協力を依頼した。

結果として、20 名から実際にインタビュー調査への協力を得られた。インタビューイのプロフィールは、表 1 のとおりである。

インタビュー調査の概要は以下のとおりである。インタビュー調査は 2020 年 11 月～12 月にかけて、オンライン（Zoom）で実施した。1 人当たりの時間は 1 時間程度とした。中心的な質問項目として、これまでの学校歴、IB の履修を選択した理由、進路選択の経緯について（志望大学をどのように決定したか、進路選択への IB の学習の影響、進路選択の際に感じた困難とそれをどのように乗り越えたのか、高校での進路指導や保護者とのやり取り）、進路選択を振り返ってよかったことや後悔していること等を用意した。インタビューイの許可を得たうえで、インタビューの内容は全て録音、文字化した。

## 2-2. インタビュー調査の結果

以下、インタビュー調査の結果を述べる。なお、本章においては、できるだけ IB 修了生の声をそのまま、掲載することとした。

### 2-2-1. IB 修了生が海外／日本の大学進学に至った理由

IB 修了生は、なぜ、海外／日本の大学への進学を希望するに至ったのか。本項では、a) 一貫して海外大学を希望していた場合（象限Ⅰ、Ⅴ）、b) 進路希望を日本の大学から海外大学に変更した場合（象限Ⅱ、Ⅵ）、c) 一貫して日本の大学を希望していた場合（象限Ⅳ、Ⅷ）、d) 進路希望を海外大学から日本の大学に変更した場合（象限Ⅲ、Ⅶ）に分けて、インタビューイの語りを紹介する。引用の際、個人情報の特定につながる恐れのある箇所は、【】を付し調整を加えている。また、必要に応じて、（）を付し補足を加えている。

く「進路変更」に分類した。

表記	布置象限	出身校 (IB認定校)	所属大学	所属する学部学科	学年	後期中等教育段階までの海外経験	調査日
G1さん	I	日本の高校 (私立)	海外の大学 (米国)	リベラルアーツ	2	4歳～9歳 (海外の現地校)	2020/11/11
G2さん	II	日本の高校 (私立)	海外の大学 (米国)	リベラルアーツ	3	小5、中1 (ホームステイ)	2020/11/12
G3さん	III	日本の高校 (公立)	日本の大学 (私立)	法	2	小4～中3 (日本人学校、海外の現地校)	2020/11/13
G4さん		日本の高校 (公立)	日本の大学 (私立)	環境情報	1	1歳～5歳、小5～中3 (日本人学校、海外の現地校)	2020/11/13
G5さん		日本のインターナショナルスクール	日本の大学 (国立)	医	3	小5～高1 (海外の現地校)	2020/11/17
G6さん	V	海外のインターナショナルスクール (シンガポール)	海外の大学 (英国)	工	1	小4～高3 (インターナショナルスクール)	2020/12/9
G7さん		海外のインターナショナルスクール (香港)	海外の大学 (オランダ)	コンピュータ科学	2	就学前、高2～高3 (インターナショナルスクール)	2020/12/15
G8さん		海外のインターナショナルスクール (タイ)	海外の大学 (トルコ)	医	3	0歳～2歳、5歳～小1、小2～高3 (海外の現地校、日本人学校、インターナショナルスクール)	2020/12/16
G9さん		海外のインターナショナルスクール (マレーシア)	海外の大学 (カナダ)	リベラルアーツ	2	3歳～6歳 / Year6～Year9 (インターナショナルスクール)	2020/12/24
G10さん	VI	海外のインターナショナルスクール (カナダ)	海外の大学 (米国)	未定	1	高2～高3 (インターナショナルスクール)	2020/12/2
G11さん		海外のインターナショナルスクール (ドイツ)	海外の大学 (英国)	経営	1	中1～高3 (日本人学校、インターナショナルスクール)	2020/12/3
G12さん		海外のインターナショナルスクール (英国)	海外の大学 (英国)	数	3	0歳、中1～高3 (インターナショナルスクール)	2020/12/16
G13さん	VII	海外の現地校 (オーストラリア)	日本の大学 (私立)	商	4	就学前、高1～高3 (海外の現地校)	2020/11/18
G14さん		海外の現地校 (オーストラリア)	日本の大学 (私立)	リベラルアーツ	3	中2～高3 (日本人学校、海外の現地校)	2020/11/20
G15さん		海外のインターナショナルスクール (英国)	日本の大学 (国立)	経済	1	2歳～小3、高1～高3 (海外の現地校、インターナショナルスクール)	2020/11/24
G16さん		海外のインターナショナルスクール (カンボジア)	日本の大学 (私立)	リベラルアーツ	2	4歳～高3 (海外の現地校、日本人学校、インターナショナルスクール)	2020/11/25
G17さん	VIII	海外のインターナショナルスクール (シンガポール)	日本の大学 (国立)	法	1	高2～高3 (インターナショナルスクール)	2020/11/26
G18さん		海外のインターナショナルスクール (ドイツ)	日本の大学 (国立)	数	4	中3～高3 (インターナショナルスクール)	2020/12/9
G19さん		海外のインターナショナルスクール (フィリピン)	日本の大学 (国立)	社会	4	5歳～高3 (日本人学校、インターナショナルスクール)	2020/12/23
G20さん		海外のインターナショナルスクール (シンガポール)	日本の大学 (私立) (英語プログラム)	国際政治経済	3	高2～高3 (インターナショナルスクール)	2020/12/23

出典：筆者作成

### a) 一貫して海外大学を希望 (象限 I、V)

はじめに、一貫して海外大学を希望していた IB 修了生の語りを引用する。

- [米国の大学在学中] 「大学 4 年間で何が本当に学べるのかなとか、私の周りで大学に行って、遊んでいる人が多かったんです。だからそこに疑問を感じているところがあつたっていうのは、正直、一番大きいんですけど。でも、いろいろ考えていくと、タイとかベトナムとか、いろいろな所で、ボランティアを経験させていただいて、いろいろな国の人と話していくって自分の考えにすごく影響されるし、正直楽しくなるっていうか、こういう視点もあるんだとか、そういうことに気付いて。いろいろな人と出会えた方がいいな、いろいろな自分にはない考えをもっている人たちと多く接した方がきっといいだろうなっていうのがあって。留学生とか、アメリカの大学すごく多くて、私の大学も 2 割留学生だったりして、アメリカの大学って比較的いろいろな、人種とかも考えたり、あと、親の経済面とかも考えて、トータルで可否を判定しているところがあるので、そういう環境に飛び込んでいった方が、自分的には、将来的にはプラスかなと思ったのがあって。私は田舎でずっと育ってきたので、都会の大学は難しいと思うところがあって。私の小中高全部小さいんで、人数が少ないので、総合大学よりは、小規模大学がいいと思って、留学生の割合、大学の規模、ロケーションなどを考えて、今の大学になったっていうのがあります。」 (G1 さん)
- [英国の大学在学中] 「もともと海外に住んでいたんで日本の大学は最初から考えて

なかったんで。海外重視として、お姉ちゃんがイギリスのスコットランドの大学に行っていたのでイギリスでもいいかなみたいな感じで考えたりして。アメリカは IB プラスで SAT<sup>10</sup>とか取らなくちゃいけないんです。それが大変だったっていうのもあって。あと 12 年生の夏に、ブラウンユニバーシティにサマースクールみたいので行ったんですけど、アメリカ、ちょっと怖いっていうのがあって。アメリカ怖いと思ってアメリカよりはまだ、学校から行くんだったら大半がアメリカ、もしくはイギリスなんです。だからアメリカじゃなかったからイギリスかな。(中略) IB で日本、受けるのって海外を受けるより大変なんです。」(G6 さん)

- ・ [オランダの大学在学中] 「やっぱり、ヨーロッパに行きたいなってなって。ドイツがもちろん候補に挙がって、でもドイツ語喋れないしなっていうので、周辺の諸国で、英語でできるコースっていうのの考えると、オランダの今いる大学とか他の大学とかが、英語でやるコースがあったんで、そういう所をメインに応募しました。」(G7 さん)
- ・ [トルコの大学在学中] 「大学を見据えたときに、父がすごく愛国心の強い人で。いわゆる、セミリングルになってほしくないみたいな願望がすごく強い人なんです。なので、トルコの文化も言葉もしっかりとできるようになってほしいってことで、できればトルコの大学には将来通ってほしいっていうのを、ずっと小さい頃から言われていたんですね。(中略)最終的にトルコを選択した大きな理由としては、英語で学べるんですね、トルコの医学部って。英語で学べるっていうことを踏まえると、やっぱり IB で培った知識も使えるっていうのも大きかったし。あと、自分の言語的に日本の医学部に進学した場合、恐らく、トルコでは医者にはなれないだろうなっていうふうに思ったんですね。トルコで医学部卒業した場合だと、割と日本では外国の医学部を卒業した医師にも寛容なんですよ。試験は受けさせてくれるっていうのが基本的なシステムで。だから、僕が仮にトルコの医学部を卒業しても日本に帰ってきて医師国家試験を受けることは可能なんです。なので、トルコの学校を卒業した場合、自分は恐らく二つの国で医師免許を取得できるだろうなと思いました。」(G8 さん)
- ・ [カナダの大学に在学中] 「例えば、最初に候補にあがったのがアメリカとかカナダとかオーストラリアで。イギリスだとイギリスに行く方は、A レベルと同じように(専門分野が)決まっている方の方が多かったんでそれはなしで。アメリカ、カナダかオーストラリアってなったときに、日本以外の方が良かったので。英語を使いたかったんで。アメリカだと、一応受けたんですけど学費が高めだし、政治的に混乱していたかなっていうのもあって。オーストラリアも最後まで悩んでいたんですけど、カナダだとフランス語も使える。フランス語もずっと習っていたので、専攻もアーツ・アンド・サイエンス、両方できる学部があったのでここが一番いいかなって。」(G9 さん)

上記の語りから、一貫して海外大学を希望していた理由として、日本の大学の学習環境への疑問、多様性の重視(G1 さん)、兄弟姉妹の影響、日本の大学の受験手続きの煩雑さ(G6 さん)、外国(ドイツ)に住んでいた経験(G7 さん)、親の影響(G8 さん)、英語で学びたい(G9 さん)といったことが挙げられる。そもそも、「一貫して海外大学を希望していた」という点で、上記の 5 名は括られるが、その所属している大学の所在は、米国、英国、オランダ、トルコ、カナダと多様である。それぞれの国の選択理由としては、上記の理由の他に、学費の問題と、言語の問題が挙げられる。すなわち、学費の点で、米国の

---

<sup>10</sup> 非営利法人であるカレッジボードが主催する標準テストを指す。

大学は敬遠される傾向にある。加えて、英語プログラムを備えているオランダとトルコの大学がそれぞれ、進学先として選択される事例が確認された。

#### b) 進路希望を日本の大学から海外大学に変更（象限Ⅱ、Ⅵ）

次に、進路希望を日本の大学から海外大学に変更した IB 修了生 4 名の語りを引用する。

- ・ [米国の大学に在学中] 「オープンキャンパス。でも、そのとき行って、全然しっくりこなかったんです。自分が【日本の X 大学】にいて、何ができる、何を学ぶのかなって考えたときに、結局、大学に進むまで、あまり理系の研究をしたくなかったのかもしれないっていうのに気付いて。で、高 2 の夏休みに、エイチラボというサマーキャンプがあったんですけど。エイチラボっていうのは、アメリカの大学とか、海外大学の大学生のメンターがいて、それで大学の雰囲気とかを、いろいろ聞く中で、そっちの自由だとか、いろいろリベラルアーツ教育ですよ。いろいろな学科、同時に学べたりする環境に、ある種の憧れをもって、アメリカの大学も意識するようになります。」 (G2 さん)
- ・ [米国の大学に在学中] 「まず、そもそも海外の大学っていうのを受けるイメージがないっていうか、受けていいものなんだっていうのを知らなかったところですかね。そういう人って、今、なんで日本の大学、行きたいのって。友達にもそのとき当時、聞いていたら、別にそもそも海外って選択肢がないんだとか、多分そういう状況だと。一応、物理的には可能だけれど、それって日本人がすることじゃないよねみたいな感じに思っていたからなのかと思います。(中略) もうここで海外 (UWC) 来たら、もう海外、行くしかないだろうっていう勢いはありましたね。ここで日本、帰ってきたら、何のために行ったのみたいな。(中略) で、考えたんですけど、イギリスとアメリカっていうの、まずそこで考えて。有名な大学ってイギリスとアメリカにあるなってなって。ただ、僕、やりたいことが決まっていなかったんで、イギリスはないなというふうに思って。アメリカの、見たんですけど、どうもこれ、アメリカのなかで(中略) リベラルアーツやるんだったら、リベラル・アーツ・カレッジがいいっていうんで、リベラルアーツ系の学校に結構、少人数の授業が多いようなところを選びたいなっていうふうにまず思ったんですね。」 (G10 さん)
- ・ [英国の大学に在学中] 「やっぱり日本人だし、日本というオプションは外せないかなというのはあったのと、あとあまり日本が良かったというよりは、海外にあまり興味がなかったんで。(中略) でも知り合いで 1 人、日本に留学、【日本の Y 大学】のプログラムに入学して、そこからイギリスに受験し直した先輩がいて、その子と結構仲が良かったので、いろいろ話は聞いていたんですけど。その子の影響で何となく海外も視野に入れ始めたというか。それで、そこから何となく日本以外にも調べ始めたのがあります。(中略) でも何となくやっぱり海外の方が、学習レベルが高いみたいな印象があったので。そういう意味ではせっかく海外にいて、しかも IB を取っているんで、そこで海外にいるチャンスがあるんだったら、そのまま続けてもいいんじゃないかというふうに考え始めて、そこからイギリスとアメリカを考え始めましたね。(中略) アメリカはやはりサマーキャンプに行つて。アメリカに行ったことがなかったんで、どういう感じかなっていうのを。で、すごく楽しかったんですけど、でもイギリスの方が親と近いというのもあったし、学費の面も生活費とかもやはりアメリカはすごく高いので、というのもあって。あと 3 つ同時にアプライする、出願の時期が同じなので、3 つはさすがに厳しいなってなって、消去法でアメリカを消した感じですね。」 (G11 さん)

- ・ [英国の大学に在学中] 「正直希望というよりは、高校で寮に 1 人で残ると決めたときに、両親との契約ではないですけど、約束は『大学は日本に帰ってくるんだよね』みたいな、そういうのがあって。なので、最初は本当にイギリスの大学は考えていなくて、高校の初め。私、小さい頃から医学部に行きたかったんで、日本に帰って帰国子女受験で医学部を受けるかなというのがあったんですけど。Further Math をやったり、大学受験の話をみんながし始めたときに、日本の大学受験ってどうせ日本に帰ってからしかしないので、高校にいる間はみんなが出願するんだったら出しておくのは問題ないかなと思って、ちょっとイギリスの大学を調べて。イギリスで医学部に行く選択肢は、学費とかの関係でなかったんで、あと長さとかの関係でなかったんで、医学部じゃなかったら自分は本当に何が学びたいのかなと思って。医学部に行きたいというのは、小学校 2 年生とかのときからずっと言っていて、自分で半分信じ込んでいたみたいなものなので。本当に自分が学びたいことを探し始めたときに、医療統計という分野があるんですけど、今まさにコロナとかそういうのを数式でアナライズするみたいな科目なんですけれど、それにすごく興味をもって。数学が好きだったので、数学科に行こうと決めて大学受験の準備をしているうちに、私はケンブリッジに行きたかったんで、ケンブリッジの受験と違って結構準備をするので、調べたり面接の準備をしたりしていくうちに、イギリスの大学に行きたいなという気持ちが強くなって。(中略)私、日本の大学のオープンキャンパスみたいなのに、高校 1 年生の夏とかに行っただんですけど。すごく大教室で先生が 1 人立ってしゃべるといって、生徒(ママ)と教授の関係がまず薄いですし。あとオフィスアワーとかもあるみたいですけど、それがメインじゃないというか、大学生活のメインが勉強にないというのを感じて。日本の大学だったら、私は医科歯科大学だったら行きたいなって思っただんですけど。教授から学ぶという学び方、学ぶ方法というのが見えてこないのが問題だなと思って。日本の大学のオープンキャンパスとかに行っただけに、講義とかも模擬講義みたいなのをやるんですけど、いろいろな大学が。それって多分、ベストなパフォーマンスを見せてくるじゃないですか。でもその授業がこの程度だったら、本当の授業ってどうなのかなって、すごく思った。大学に、ここで学びたいなと思わなかったというのが、一番簡単な言い方ですけど。あとは大学生の知っている、友達じゃないですけど、知っている大学生の生活とかを見て、メインはサークルで、今、特に同級生とかが日本の大学に行っているんで、その通りだったなと自分で思うんですけど。と思ったことが、一番大きいです。」(G12 さん)

上記の語りから、日本の大学から海外大学への進路変更のきっかけは、オープンキャンパス(G2 さん、G12 さん)、サマーキャンプ(G2 さん)、UWC への留学(G10 さん)、先輩の影響(G11 さん)、日本の大学の学習環境への疑問(G11 さん、G12 さん)といった点にあると言える。すなわち、当初、日本の大学への進学を検討していた IB 修了生のなかには、オープンキャンパスや先輩とのやりとり等を通じて、日本の大学は「大学生活のメインが勉強にない」(G12 さん)のではないかという疑問(イメージ)を抱くようになる。そして「そういう大学生活は送りたいくないな」(G12 さん)と考えた場合に、進路変更に至る。加えて、サマーキャンプといった海外大学について知る機会も、「外」に目を開くきっかけとなるといえる。

#### c) 一貫して日本の大学を希望(象限Ⅳ、Ⅷ)

第三に、一貫して日本の大学を希望していた IB 修了生の語りを引用する。

- ・ 「希望していたというよりも、帰るのかなという。海外の大学は学費、基本的に高いので、日本に帰るんだろうなという感じでしたね。(中略)9 月入学、一応、考えたと思うんですけど、理系はちょっと 9 月入学、あまり充実してなかったというような

印象がありましたね、特に国立だと。なので、理系に進みたかったのが 4 月でっていう感じでした。(中略) 場所というか、大学をどこを選ぶかっていうのは、あまり関係がないかなと思っていました。もともと理学に興味があったので、その理学の強みっていうのは、紙とペンさえあればどこでもできるし、誰とでも通じ合えるっていうことなので。お金っていう仮定を外しても、それがどうという話にはならなかったかなと思いますね。(中略) 留学の機会は、一応設けられては、確かにいるんですけども、やっぱりさっき申し上げたように、数学っていう特性上、留学のメリットがもうほとんどないので、あまり選択肢にはなかったですね。」(G18 さん)

- ・ 「小さい頃からずっとフィリピンに住んでいたのが、日本の大学に行きたいっていうのはずっと思っていて。そのなかで日本は結構、文系、理系って分かれているっていうのは聞いていたんですけど。日本の受験のスタイル、帰国子女受験にしても、理系だとまた一から理系の知識だったりっていうのを日本語で学び直さないといけないっていうのを聞いていて、その受験のために。それは私にはできないなと思って。あとは、学部を見たときに、あんまりそこまで専門的に理系の何かをやりたいっていうことはなかったの。もっと、私は結構、社会科学系のことに興味があったので。経済だったりとか、政治だったり、国際政治だったりとか、そういうことを幅広く学べる学部だったりとか。大学に行きたいなっていうのを、結構、12 年生のときに思い始めて、それで、【所属大学】っていう大学を実は高校のとき、全く知らなかったんですけど。帰国子女がすごくたくさん行く大学受験用の予備校があって、そのときに、先輩だったりとか、先生にこういう大学がいいんじゃないっていうのを薦められて、今に至るっていう感じです。(中略) 交換留学に行こうって思ったのは本当に大学に入ってからで。一つとして、IB だったりとか、高校までずっと英語の授業で頑張ってきて。日本の大学に入れたのはすごくうれしかったんですけど、どんどん日本に染まっていくというか、英語もちょっと、英語でそういう高レベルな会話だったりとか、授業を受けることも少なくなっていくので、それにすごく危機感を感じて。英語で高度な教育を受けられるところに 1 年、留学して、高校時代だったりとかの勉強を思い出したいなと思ったので、大学に入ってから交換留学、決定しました。」(G19 さん)

- ・ 「日本で暮らしたいなっていうのが結構大きかったんですよ。さっき海外、住みたいとか言っていた、全然違うことになっちゃっているんですけど。日本で暮らしたいかなっていうのが結構大きかったのと。あと学費ですね。もちろん奨学金取ればいい話なんですけれど。不確実なところでどうなんだろうなっていうので、海外はちょっと高いかなっていう。(中略) 満喫しきったっていう感じだったのか、それとも暮らしやすさから日本がいいなっていう感じだったのか。」(G20 さん)

一貫して日本の大学を希望していた理由として、数学という学問分野の特性 (G18 さん)、日本で暮らしたいという希望 (G19 さん、G20 さん)、海外大学の場合に奨学金を取れるかどうかというリスク (G20 さん) といったことが挙げられた。G18 さんの場合、数学を学ぼうと場所や言語は関係ないとの考えから、日本の大学を選択し、在学中に留学も経験していない。他方、G19 さんは一年間の交換留学を経験し、G20 さんは英語プログラムに在学していることから、日本で暮らしながら、国際的な経験を得ていると言える。

#### d) 進路希望を海外大学から日本の大学に変更 (象限Ⅲ、Ⅶ)

第四に、進路希望を海外大学から日本の大学に変更した IB 修了生の語りを引用する。

- ・ 「(海外大学に入学願書を) 出して、合格をもらっていたんですけど。やっぱり、

海外、学費の問題もあるし、あとは、専門、自分が本当にやりたいことっていうのが、本当に分からなくて。分からない状態で海外に行ったところで、海外のプレッシャー、学業もすごく大変だっていうのは聞いていたので、その中で自分はやっていけるのかっていう不安があって。あともう一つは、IB で、結構、疲れてしまって、後半。高校 3 年生のときは本当に心も身体もついていなくて。だから、このメンタルとこの気持ちで行ってしまうと、多分、立ち直れないなっていうのが自分のなかでどこかにあって。だったら、日本の大学に入って。あともう一つが、将来、やっぱり日本で働きたいって高校生のときには思っていたので。もし海外に、そんなに好きな専門じゃないし、高いお金を払って、自分の生活に見合うかどうか分からないところに 4 年間行って、でも、結局、日本に戻ってくるなら、日本の大学でいいじゃんっていうふうになったんですね。」 (G3 さん)

- 「周りに影響されていた部分とかもあったと思うんですけど、日本の大学って、どうしても、入ったらもう終わりっていうか、入ったら、そこからあんまり勉強しないみたいなイメージがあったので。そういう環境にいるのは、どうしても嫌だったっていうのはあったので。海外とか、もっと大学入学後、自分が成長できるような環境に身を置きたいと思ったので、海外の大学、考えていたっていうのもありますし。あとは、私が、環境問題とかに興味があって、そういう学問を学べるのは、日本よりも海外の大学の方が、もっと専門的に学べるんじゃないかなっていうふうに思って、それで海外の大学を、一時期、考えているときはありました。(中略) 海外も結構、迷っていたんですけど、お金の問題とか、そういうのも、もろもろ考えたときに、日本の大学に進学した方がリスクは少ないんじゃないかなっていうふうに思って、決めたっていう感じですね。(中略) 早稲田とか、慶応とか、そういう大学に、もし進学できれば、その学校が提携している海外の大学のレベルとかもすごく高いので、それで別に 1 年交換留学とかしても全然いいなっていうふうに思ったので、それで国内の大学に進学を決めました。」 (G4 さん)
- 「実際にアメリカの大学に行ったときに、そこの現地のメディカルスクールの先生とお話とか少しさせていただいて。やっぱり外国籍の人だと、メディカルスクールに入るのがまず難しいっていうのがあって。で、外国人は自分の国で医学部出てから戻ってくる方が、比較的、まあそっちも難しいんですけど、そっちの方がやる人が多いっていうふうに聞いて。で、せっかく日本の大学も受けているなら、で、受かったならそちらの選択肢もあるのかなっていうふうに思います。」 (G5 さん)
- 「結構、最後まで海外に行こうっていうところは悩んでいたのですが、日本に行きたい、帰りたいっていう方。純粹に就職とかの面で、日本の大学に行った方がいいんじゃないかなっていうふうに考えていたので。ちょっと行きたい大学とかはなく。その中で、行きたい学部だけはあったので、そこを中心にいろいろ。それこそ、就職に有利そうな、上から大学見ていって受験したっていう感じですね。(中略) 4 年生としてよかったなっていうふうに思うところは、就職関連のところ、結構、有利に働いたところはあったんじゃないかなっていうふうに。例えば卒業生の方とのパイプとかっていうのが結構あるので、こういった面ではよかったとは思いますが。同時に、高校の頃みたいな、英語に触れるっていうような機会があまりなかったので。逆によかったっていうんだとしたら、【所属大学】が結構、海外に留学生を出しているの、僕も 1 年間、留学に行かせていただいて。そういった面では、海外と日本、両方いいとこ取りができたんじゃないかなって考えています。」 (G13 さん)
- 「私は、最初はオーストラリアの大学に進みたいなっていうふうに考えていて。た

だ、学費が本当に半端なかったの、奨学金がもらえないとね、みたいなことを家族と話してっていうふうにはなっていて。なので、一応、メルボルン大学だったんですけど、行きたかった所が。メルボルン大学にも応募したんですけど、奨学金の枠に、多分、1とか足りなくて、もらえなかったんですね、結局。(中略) 教員になりたいなっていう、そのときちょっとだけ芽生えていて。その選択肢だとかっていうのを考えたりとか、自分が将来どこで働くかってことを考えると日本なのかなって思ったので、大学は日本にしました。(中略) 私、結構、日本の大学受験をするために、日本語で何かを勉強しなければいけないのがすごく嫌で。日本語で数学勉強したりだとか、そういう試験を受けなきゃいけないっていうのがすごく嫌だったので、そんな両立はできないっていうふうにごく思っていて。あとは、IB でこんなに頑張ったって自分で思っていたので、それを見て、決めてくれるところに絞って探していたので。となると、すごく選択肢も少なくなるんですけど、でも、【所属大学】の勉強内容にひかれたのももちろんそうなんですけれど、結構、試験のかたちとして、頑張りをみってくれる面が見て取れたんですね。(中略) 【所属大学】は、高校 3 年間に相当するところの成績と、卒業見込みが、大抵、その成績に関する書類として、他の大学とかからも出さなきゃいけない書類になるんですけど、それの他に、3年間の諸活動、こういうことやりましたっていうことを、結構、詳しく書かせるものがあったりとか、あなたが海外で学んだことは何ですかっていう設問があったりとか、あなたはどのような勉強していましたかっていうのがあったりとか。あとは、その他に志望動機と課題のエッセイがあったので。何だかすごく、それは、私の中身を知ろうとしてくれているなっていうのが伝わってきて、ひかれましたね。」(G14 さん)

- 「中学のときはずっと、アメリカの大学に進学したいと考えていました。ミシガン出身なので、いつかあそこに戻りたいっていう思いでミシガン大学がいいなとずっと思っていたんですけど。高校でイギリス、ロンドンまで行ったときに、一応ロンドンの大学も見学したんですけど、イギリス国籍をもっていないので、授業料が普通のイギリス人の生徒と比べると、インターナショナルの生徒はその 4 倍の学費を払わされることに衝撃を受けまして、ロンドンは無理だなと。そこのところから、進学先はもう少し学費の安いところがいいと思っていて。アメリカの場合は、そのときに SAT を取らないと大学進学条件に入らないんですけど。IB と SAT の勉強を両立させることがとても難しいっていうのを、もう一人、IB と SAT を両立しているクラスメートがいて、その人はもう 2、3 回、SAT を取っていて、その人の苦勞を見ていたので、アメリカもちょっと厳しいかなと思いき、結局、日本に戻りました。(中略) (親からは) 大学自体が、海外の大学進学するのはちょっと経済的に厳しいかもしれないって言われて。それなら日本の長期留学があるところを選んだらどうみたいなことを言われました。」(G15 さん)
- 「医学部に行きたいっていうのは、思っていたんですけど。実際にそれで何かアクションを起こしたかって言われたら、そういうわけではなくて。ただ、医学部受験の夏期講習みたいなのに、11 年生の夏に行ったんですね。で、その印象がとてつもなく悪くて。(中略) そこで、迷い始めて。他の大学のオープンキャンパスとかも行って。それで、多分、11 年生の冬ぐらいに、うーんって思って。まだ何が自分でしたいのかわからないのと、あと、歴史がすごく好きになったんですね、その先生が。最初は、全然、歴史を取るつもりじゃなかったんですけど。たまたま取った歴史が好きになって、もっと学びたいなっていう気持ちが出て。だったら、リベラルアーツがいいなっていうので。多分、11 年生の冬ぐらいから、ICU とか、早稲田の国際教養学部とかを考え始めたんだと思います。(中略) 正直、日本で暮らしたことがなかったので、日本で暮らしたいなっていうのと、日本語も英語もどっちも伸ばしたいなってい



うのもあって。あとは、学費の問題で。やっぱり、日本が一番安いっていったら。」  
(G16さん)

- ・ 「やっぱり 2 年じゃ足りないなと思って、海外経験が。自分のなかでまだ終わりたくないなという気持ちが強かった時期もあって、海外で大学行けるなら、行きたいなと思ってたんですけども。そのときは、まだ学部をあまり決めていなくて、漠然と思っていたので。今の学部を決めるってなったときに、法学部なので、やっぱり日本の法について、日本語でまず学んでから、もしまだ興味があったら、海外の大学に行ってもいいかなと思うようになりました。(中略) 国立私立に拘わらず、絶対に、留学制度、こういうのありますよって、どの大学も提示してくださって。それだったら、日本に帰っても、ずっと日本に縛り付けられるではないですけど、日本にしか選択肢がないっていうわけではないんだなと思ったら、そんなに抵抗なく、帰ってくる選択をできたなと思います。」 (G17さん)

進路希望を海外大学から日本の大学に変更した理由として、学費・金銭面 (G3 さん、G4 さん、G14 さん、G15 さん)、専門が未定 (G3 さん、G16 さん)、心理的安定 (G3 さん)、日本の大学のグローバル化 (G4 さん、G13 さん、G17 さん)、学問分野 (G5 さん/医学、G17 さん/法学)、将来日本で働きたい (G13 さん、G14 さん)、日本で暮らしたい (G16 さん) といったものが挙げられる。進路希望を日本の大学から海外大学に変更した場合に比して、明確なきっかけがなく、進路希望の変更に至っている。また、やはり、経済的なハードルを越えられず、日本の大学への進学に至った事例が複数確認された。

## 2-2-2. 海外/日本の大学進学を阻害する要因

IB 修了生にとって、海外/日本の大学への進学を阻害する要因があるとすれば、それは何か。この点について本項では検討する。インタビュー調査の結果に基づくと、a) 情報収集と、b) 奨学金 (経済的要因)、以上 2 点が主な阻害要因として析出された。

### a) 情報収集

第一に、情報収集に関連する語りを引用する。

- ・ 「これも辛いところではあったんですけど。情報が全然ないっていうのと、大学を訪問できないっていうのが、難しいと感じるところがありましたし。あとは、私の高校の進路指導があまり、充実してなくて、国内進学の生徒も困っていたんですけど、特に海外進学をした私は、1人でやってねみたいところがあって、サポートできないわみたいな感じだったので、孤独だったっていうか。なので、もう全部ネットとかです。」 (G1さん)
- ・ 「アメリカの大学の話になると、その先生も、あまりアメリカの大学のことを知らなくて。アメリカの大学、DPの試験、スコアっていうものが、アメリカの大学に、あんまり反映されないっていうか。例えば、オーストラリアの大学だったりとか、イギリスの大学だったりとか、アジアの大学だったりっていうのは、IBスコアを重要視するように、僕はそう思って。でも、アメリカっていうのは、総合的に評価するので。IBもそこまでアメリカで浸透していないから、それで、その進路指導の先生も、IB専門の先生なので、あまりアメリカの大学のことについて、詳しくなくて。だったので、結局、1人になってしまって。」 (G2さん)
- ・ 「学校では、大学を選ぶためのサポートの先生っていうのが一応、いたんですけど、残念ながらとても頼りにならなくて。本当に、大学の知識もあまりないし全然、

頼れなかったので、ほとんど自分で、他の友達もどうやっているかっていうのを聞いて。」(G9さん)

- ・ 「UAC、ユニバーシティ・アドバイザー・カウンセラーみたいな人が 1 人、先生が 1 人ついて、最初に会ったときにはどこ行きたいの、どこ考えているのみみたいな。今の成績だったらここには行けるよみたいなことを話したりして。あとは(自分で)決めてきた。多分、イギリスだったらパーソナル・ステートメントを書くときにそれを直してくれる人みたいな感じで。それを一緒に見ながら提出してから受かるまで全部、見てくれる人が生徒 1 人につくみたいな感じでした。」(G6さん)
- ・ 「学校からのサポートは、私のインターは、結構、手厚くやってくれている方だとは思ったんですけど。12 年生のときに、生徒は必ず 1 回、学年のカウンセラーさんと 1 対 1 で話して、進路について話すっていう時間がある。でも、私の場合は、ずっと日本の大学を希望していたので、カウンセラーさんも日本の大学の事情っていうのはあまり深く知らなくて、本当に慶應と早稲田ぐらいしか知らないみたいな感じだったので。でも、先輩を紹介してくれたりだとか、ジャパニーズのクラスを取っていて、それを取っていた先輩が大学入った後にまた戻ってきてくれて、いろいろ話をしてくれたりだとか、そういうことはすごくしてくれたので。どういう大学があるのかを知るだけでも、結構、違ったのかなと思って。日本人は多分、縦のつながりがすごく強かったので。結構、日本語の先生だったりとか、カウンセラーさんも率先して OB さん、OG さんを連れてきてくれたりして。それはすごく良かったかなと思う。」(G19さん)

進学に関する情報収集に関連して、一人で頑張らなければならなかったという状況(G1さん、G2さん、G9さん)、反対に、学校からのサポートが手厚かったという状況(G6さん、G19さん)が両方確認された。学校からのサポートが手厚かったという状況は、海外の IB 認定校出身者からのみ聞かれたが、一人で頑張らなければならなかったという状況は、日本の IB 認定校出身者と海外の IB 認定校出身者の両方から確認された。今後、日本の IB 認定校の増加に伴い、進路指導カウンセラーの配置を含めて、いかに適切に海外大学への進学に必要な情報を提供できるかが課題になると思われる。

## b) 奨学金(経済的要因)

第二に、奨学金(経済的要因)に関連する語りを引用する。

- ・ 「いろいろ、日本の財団とか、奨学金関連の募集とか、探してみたんですけどすごく少なくて。あとは、専攻を既に決めていないといけない奨学金とかもあって。例えば、私たちは理系のこの専攻しか支援しませんとか、数学だけとか、すごく限られていて。あとは、大学自体を絞っている奨学金機構とかもあって。専攻とかはまだ決めたくなかった私からすると、すごく少なかったなって、選択肢がなかったなっていうのはあります。だから、もう少しいろいろな、政府っていうよりはいろいろな財団が、幅広く海外留学を支援してくれたらっていうのは感じます。」(G1さん)
- ・ 「でもやっぱり、奨学金が、結局最後の決め手というか。お金がないものは、入れないので、大学には。一番出してくれたのが、そこだったので。最終的に合格通知が出て、どれに絞ろうかというようなタイミングのときに、奨学金が一番多い所。残念ながら、僕の場合は、民間の団体の奨学金がもらえなかった。JASSO もそうでしたけれど。JASSO は応募しなかったんですけど。DP が忙しくて。」(G2さん)

- ・ 「海外大学に進学するときに、給付型の奨学金を提供されていると思うんですけど、先ほど GPA が 3.7 以上ないと駄目みたいな感じのことを書かれていたと思うんですけど、それも、IB 生向けというよりは、一般の高校生も含めて作られた基準だと思うんですよ。GPA3.7 って一律設定するのは、ちょっとどうなんだろうっていうふうに、個人的に思っています。やっぱり応募する人数とかも多いと思うので、一定の基準っていうのは必要だと思うんですけど。偏差値 50 台の学校の 3.7 と、偏差値 70 台の 3.7 って、意味が違うって個人的に思っています。そういうところも含めた審査っていうのも、一つ、必要なかなっていうふうに思っています。二つ目は、GPA だけじゃなくって、SAT とか、IB とか、A レベルとか、そういう海外の試験の点数の基準とかでも決めてほしいなっていうふうに思いました。」 (G4 さん)
- ・ 「最初に JASSO っていう話があったんですけど、あれもすごく調べて、日本の高校を卒業していないと駄目っていうので、駄目かっていうので。それで、なんでやねんみたいな感じ。日本人なんだけどなとか思いながら、でもしょうがないかっていう。」 (G7 さん)
- ・ 「ネックにならない訳のない金額なので、アメリカの。だから仕方ないと言えば仕方ないんですけどね。増えてきているのは承知なんですけれど。国内からとか国外からでも、いろいろな奨学金制度が充実してきているっていうのはあるんですけど、まだでも全然、足りていないかなっていうような。特に IB やっている人に関してはすごく足りていないかなっていうふうに思ったりはしていますね。」 (G10 さん)
- ・ 「かなり選抜基準というのが曖昧なので、結局もらえなかったんですけど。その理由が何もないので、そういうところのフィードバックがあるとこちらも、例えばもう一度提出したいと思うときに、役に立つかなとは思いますが。」 (G12 さん)
- ・ 「奨学金を出すときにもうちょっと枠を、いろいろ別にしてもいいんじゃないかなっていうふうにはすごく思っています。例えば、それこそ、私みたいに、国際バカロレアを得てきた子たちの枠とか、あとは、アメリカの SAT を得てきた子の枠とかっていうのがあってもいいんじゃないかなと思ったりとか。あとは、やっぱり、文系の奨学金は少ない印象があります。そこはしょうがないというか、日本社会的に、やっぱり、理系が必要とされている点で、差が出てしまうのだと思うんですけど。あとは、理系は学費高いですし、出てしまうと思うんですけど。もうちょっと文系の奨学金制度みたいなものが充実したらいいなっていうふうには、当時は思っていました。」 (G14 さん)
- ・ 「基準がもう少し、何ていうんでしょ、奨学金を受けられる範囲をもう少し広げてもらいたかったですね。ぎりぎり受けられないっていう、受けられなかったの。それでもそこまで経済的にいいわけでもなく、悪いわけではないんですけど、もし範囲が広がったらよかったかなと。受けられることがあればよかったんですけど。」 (G15 さん)

以上の語りより、奨学金制度をめぐって、分野を限定せず幅広く支援してほしい (G1 さん)、理系だけでなく文系に対する支援を厚くしてほしい (G14 さん)、JASSO の奨学金の締切りと IB の最終試験の時期が重なるため考慮してほしい (G2 さん)、GPA の基準を全ての高校で一律に設定するのを見直してほしい (G4 さん)、日本の高校出身者に限定されて応募が叶わなかった (G7 さん)、選考に漏れたときにその理由をフィードバックしてほしい (G12 さん)、経済状況の基準をわずかに満たせなかったため、もう少し範囲が広

かったら良かった（G15さん）等、多様な意見を聞くことができた。これらは、奨学金制度から漏れ出てしまった学生を含め、当事者の貴重な経験や意見である。これらの知見を基に今後の制度改善につなげていく方途について検討する必要があると考える。

### 3. 研究課題 2：教員調査—進路指導—

#### 3-1. 調査の概要

本章では、研究課題 2 について検討する。

研究課題 2：日本の IB 認定校では、いかなる進路指導が行われているのか。

上記の課題を達成するために、半構造化インタビューの手法をとった。インタビューの一覧は表 2 のとおりである。インタビューは全員、担任あるいは進路指導担当教諭（カレッジ・カウンセラー）として、各学校で進路指導を担っている。

表記	所属のIB認定校	調査日
A教諭	I校（私立）	2021/3/30
B教諭	II校（公立）	2021/3/8
C教諭		
D教諭	III校（公立）	2021/5/26
E教諭		

出典：筆者作成

インタビュー調査の概要を以下に示す。インタビュー調査は 2021 年 3 月～5 月にかけて、オンライン（Zoom）で実施した。II校およびIII校では、グループインタビューの方法をとった。1人（1回）当たりの時間は1時間程度とした。中心的な質問項目として、これまでの経歴、IB 履修生に対する進路指導、進路指導の課題、IB 履修生の進路選択の阻害要因、IB 履修生の進路選択・進路実現に向けた支援や制度改善等を用意した。インタビューの許可を得たうえで、インタビューの内容は全て録音、文字化した。

#### 3-2. インタビュー調査の結果

以下、I校（私立）、II校（公立）、III校（公立）について、インタビュー調査の結果を述べる。引用の際、個人情報の特定につながる恐れのある箇所は、【】を付し調整を加えている。また、必要に応じて、（）を付し補足を加えている。

##### 3-2-1. I校（私立）の事例

###### IB 履修生に対する進路指導

A 教諭によると、IB 履修生の多くは、高校 2 年生頃には、希望の進路を明確にできている。意識の高い生徒は、高校入学時点で、「この大学に入りたから IB の履修を選ぶ」といった考えをもっているケースもある。

I 校では、「IB を履修しているのだから、海外の大学に進学しなさい」というような指導はしていないという。しかし、管理職の教員らは、IB 履修生には海外大学に目を向けてほしいという思いをもっているかもしれない。また、I 校では、留学生もしくは親が外国籍の生徒が少なくないため、加えて、ハワイやカナダ等に短期留学する機会があるため、海外大学へ進学することに抵抗を感じていない生徒も多い。基本的には、「本人の赴くままにというか、能力と相談しなさいよっていうような」（A 教諭）方針で、進路指導が行われている。

進路に関する生徒とのかかわりについて、ホームルーム等で時間を特別に設けるといよりも、日々の会話を通じてコミュニケーションを図っているという。学校として、大規模な大学（専門学校、短期大学も含む）説明会を、民間企業の協力のもと、実施すること

もある。

IB 修了証を活用した日本の大学への進学機会は、まだ充分ではないように感じられている。ゆえに、IB 修了証を直接的に活用するのではなく、IB の学習経験やそれを通じて得られたスキルを活かして、プレゼンテーションやディスカッションが課せられる入試を受験し、日本の大学に進学する生徒も多い。

高校 3 年生の担任以外の教員も、入試で課せられる面接やプレゼンテーションの練習などにおいて、生徒をサポートしている。また、外国籍の教員が、海外大学の様式にあわせて推薦書を書いてくれることもある。

なお、海外大学に進学する IB 履修生が多い年と日本の大学に進学する IB 履修生が多い年とが、それぞれある。

### 進路指導の課題

A 教諭によると、学校全体の進路指導を統括している部署において、IB を活用した進学（入試）に関する理解が深まっていない。IB 専門の進路指導部のような部署ができれば理想的と思われるが、人力的な課題もあり、実現は難しい。

学校と留学の斡旋企業とが提携して、海外大学の情報提供にあたっている。I 校の留学生の多くはアジア圏（中国、韓国、インドネシア、タイなど）の出身者であるため、当初は、海外大学の情報が中国などに偏っている傾向があった。しかし、2021 年度、企業との提携を強化したこと等によって、英語圏（欧州あるいはオーストラリア等）の大学に関する情報提供も多くなされるようになった<sup>11</sup>。

IB 履修生のなかには、IB を履修している自分を過信してしまい、現実的な志望校の設定が難しい生徒もいるという。そういった生徒に対しては、「第 1 志望に入学できるなら、それは素晴らしいけれど、担任としてはリスクも考慮して第 2、第 3 の候補についても考えてほしい」と伝えている。

### IB 履修生の進路選択の阻害要因

日本の大学が IB 入試を実施している場合、秋頃の受験から、合格の確定（IB の最終試験のスコアが出される 1 月上旬以降）までに、生徒は併願を認められないことが多い。それは、生徒にとって悩ましく、日本の入試の時期と IB のスコアが出される時期のミスマッチが感じられている。

また、IB 履修生のなかには、大学入学共通テストを受ける生徒もいる。しかし、IB の最終試験が 11 月に実施されるなかで、学校として共通テスト対策をサポートすることには限界がある。

### IB 履修生の進路選択・進路実現に向けた支援や制度（奨学金含む）改善

上記のとおり、I 校においてはアジア圏からの留学生が多く、彼らは海外大学への進学に抵抗感をあまりもたない。留学生のなかには、経済的支援を受けることなく、英米の大学への進学を実現させた生徒もいた。学費やその他の要因（親類の勧めなど）により、中国あるいは台湾の大学への進学を選択した生徒もいた。

A 教諭は、I 校の IB 履修生について、学費が工面できないから海外大学に進学しないというよりも、そもそもそのような生徒（家庭）は海外進学を目指していないという印象をもっているという。その上で、A 教諭は、海外大学奨学金の存在が更に周知されれば、今まで国内にしか目を向けていなかった生徒でも海外へ選択肢が広がるのではないかと述べている。

---

<sup>11</sup> A 教諭からは、インタビュー実施後、フォローアップで I 校における進路指導に関して情報提供を受けた。

### 3-2-2. II校（公立）の事例

#### IB履修生に対する進路指導

まず、B教諭は、進路指導の方針について以下のように語った。

「私たちの希望としては、やっぱり海外大を目指してほしいってというのが、最初にあった。なので、大卒、海外大を目指すイメージで進路指導をしていくのかなってというのは、最初ありました。ただ、ふたを開けてみると、やっぱり国内だけを希望している生徒も数名いたりして。今、コロナの状態になって、併願っていう生徒もやっぱりいるので、その大方針っていうよりも、本当に生徒の個に合った指導を、一人一人していくってというのが、やっぱり大事かなというところに行き着いています。」（B教諭）

「（IB導入以前から）海外志向のある学校だったんです。海外大学に進学したいっていう生徒が、一定数、毎年いて、県や校長の考えとしても、やっぱり海外大に行く生徒をもう少し増やしたいみたいなことは、私も最初、結構、言われていて、そのなかでIBってというのが、うちの学校に決まった時点で、やっぱり海外を目指したいんだろうってというのが、ちょっとずつ感じながら。ただディプロマを取るといふことの意味として、国内でまだ浸透し切っていない分、海外に出ることの方がメリットなんだろうなって、私自身も思っています。なので、その県の意図とするものと、ディプロマの意味っていうものを、私も考えたときに、海外大ってというのは割とすんなり見えてきたっていうところではありました。」（B教諭）

II校では、IBの導入以前より海外志向が強かったという土壌があり、IB履修生に対しては、「どんどん外に出そうって感じ」（B教諭）、「国内と海外だったら、国内しか志望してなくて、いきなり海外ってのはできないけれど、海外って考えていて国内だったら、ある程度はできるというか、だからいったん海外も検討しよう」（C教諭）といった方針で進路指導が行われている。

具体的な取り組みとしては、大学について、入試におけるIB利用の可否、学習環境、専攻、学費、奨学金などの観点から、各生徒が調べ、プレゼンテーションするような活動が実施されているという。この活動の成果として、生徒は、奨学金などに、より関心を示すようになった。また、コロナ禍以前においては、10月、11月に、海外大学のアドミッション担当者を招き、説明会などが開催されていた。海外大学に在学している他のIB認定校の卒業生（IB修了生）に講演してもらう機会を設定したこともある。

海外大学進学を希望する生徒のなかには、米国の大学に進学するためにSATを受験する生徒もいる。そういった生徒に対しては、SATのトレーニングの機会を学校でもつこともある。ただし、IBのメリットとして、IB修了証をもっているとSATを免除してくれる大学もあることから、そのような大学を勧めることもする。その他、IELTSのサポートなどもしている。

#### 進路指導の課題

IB認定校にはカレッジカウンセラーを置くというルールがあり、II校ではB教諭が同職を務めているものの、その専門性についてまだ確固たる自信をもてている訳ではない。海外大学進学に関する研修を受けたいという思いがあるが、予算などの要因によって実現していない。今後、他のIB認定校から、進路指導の方法などについて話を聞いてみるという計画はある。しかし、「学校によってニーズがやっぱり違う、生徒が違う、やり方が違う、組織構造も違うので、うちはこうですけども、そちらで同じことができますかって言われると、できないことの方が多い」（B教諭）との考えもあるという。

また、II校においては、IB履修生以外の生徒が海外大学進学を目指す場合もある。そう

いった生徒と IB 履修生とは、入試の受け方に差異がある。その差異ゆえに、海外大学進学に関する説明会の内容にも違いが生じざるを得ないが、「平等な機会を与える」という考えに立つと、開催方法などが難しく感じられることもある。

また、海外大学進学に対しては、教員間でも温度差がある。海外大学進学に関するノウハウは、他校に異動になった際、必ずしも活用できる訳ではない。それゆえ、苦手意識をもっている様子の教員もいる。

### **IB 履修生の進路選択の阻害要因**

IB 履修生が日本の大学への進学を希望する場合、IB 入試を実施している大学はまだ限られているため、選択肢が狭まってしまう。また、大学が IB 入試を実施している場合であっても、合格のためのスコアが明示されていない場合が多く、スコアの明確化もなされることよいて考えている。

IB の科目選択に関して、海外大学進学希望の生徒には、English を上級レベル (Higher Level、以下 HL) で履修するように、理系志望の生徒には、志望校が入試において HL を 2 科目履修していることを求めているか確認するように、指導している。IB 履修生を、一般的な高校生と比べると、科目選択によっては途中で進路変更しづらいことが特徴として挙げられる。高校 1 年生の時点で、ある程度将来のビジョンが明確な生徒の方が、IB に向いているのではないかと思われる。

### **IB 履修生の進路選択・進路実現に向けた支援や制度（奨学金含む）改善**

奨学金の採用人数が少ないように感じる。奨学金の種類が、より豊富になったらよいのではないか。例えば、JASSO の奨学金の場合、しっかりした額を受給できるが、その半分の額の奨学金をより多くの生徒がもらえるようにできたらよいのではないか。

## **3-2-3. Ⅲ校（公立）の事例**

### **IB 履修生に対する進路指導**

D 教諭と E 教諭は、それぞれ、進路指導の方針について以下のように語った。

「生徒自身に選ばせるってところが第一の方針かなというふうに思っていますし、我々が提供できる情報は提供するけれども、こういうふうにしなさいっていうような言い方はしないっていうスタイルというか、ポリシーでやってはいます。」  
(D 教諭)

「学校全体として、やっぱり学校の方針として、生徒自身が主体性をもって、主体的に判断していくっていうような、そういう人材を育てたいっていうふうなものがあるはずなんですよね。(中略)学校全体で言うと、DP の生徒というのは、10 人前後になってしまうので、その子たちのためだけにすごく注力をして、そうじゃない子たちにこれまでどおりの指導をしていいのかっていうのが、僕のなかではすごく否定的で、みんなにとって同じようにするっていうようなことを考えると、誰にとっても自分自身でこういう情報を選択して、情報を得て、調べていくっていうような。」(E 教諭)

Ⅲ校では、IB 履修生を含めて、全ての生徒が主体的に判断できるようになってほしいという願い(理念)のもと、進路指導が行われている。ゆえに、進路に関して、「基本的には、ああしなさい、こうしなさいって」(D 教諭)言うようなことはなく、あくまで生徒の自主性が重んじられている。

具体的な仕組みとして、Ⅲ校では、「学級の担任と生徒がすごく密に関わり合っていくというような状況ではなくて、生徒がフィーリングの合う先生を選び出して」(E 教諭)、



進路を含めて話をするような体制になっている。その他、高校2年生、3年生の生徒には、受験カレンダーを作ってみなさいという指導をしている。民間企業の大学検索サイトの紹介もする。また、学校として、進路志望が似た生徒同士でコミュニティを形成し、進路選択についての経験や見通しなどを共有する機会も設けている。

### 進路指導の課題

上記のとおり、Ⅲ校では、生徒の自主性を重んじて進路指導が行われている。その一方で、押しつけにならないよう配慮しつつ、複数大学の受験を勧めるような指導も必要かもしれないという思いもD教諭からは語られた。Ⅲ校のIB履修生のなかには、国公立大学1校に絞って受験し、仮にその大学に入学を許可されなかった場合には浪人するという考えの生徒がいた。浪人することになった場合、IB履修生は一般選抜への切り替えを余儀なくされるため、それはD教諭にとって「理想とするかたちではない」という。

また、関東など都市部であれば、海外大学を紹介するイベントがしばしば開催されていると思われるが、Ⅲ校が位置するような地方では、必ずしもそのような機会が十分に確保されている訳ではない。生徒の選択肢を増やすために、海外大学の情報に触れる機会を、今後拡充していけたらよいと考えている。コロナ禍において、上記のようなイベントもオンラインで開催されているのかもしれないが、そのような情報が上手く入ってきていない。

### IB履修生の進路選択の阻害要因

Ⅲ校では、日本の大学進学を希望するIB履修生が多くいる。IB履修生が日本の大学進学を希望する場合、私立文系志望であれば、選択肢は少なくない一方、国公立理系志望の場合、選択肢が限られているように認識されている。

一般的に、高校2年生の段階においては、進路について明確化できていない生徒が多い。そういった生徒に対して、現在の日本において、IBの履修を勧めることに躊躇してしまい、「可能性（入試の選択肢）が大きい方に進んだ方がよいのでは」ということを言わざるを得ないと考える教員もなかにはいる。

### IB履修生の進路選択・進路実現に向けた支援や制度（奨学金含む）改善

JASSOを含めて、数多くの奨学金制度があるが、各生徒に合ったものを探すことは大変である。探すことを含めて必要なスキルかもしれないが、一元化された情報があると教員としてはありがたい。

奨学金に関して、「いろいろありますけれど、生徒がしがみつけないというか、振り落とされてしまうケースがたくさんある」（E教諭）。「もうどうせ駄目でしょう」というのではなく、「申し込めば通るんだというような、そういうような実感を生徒がもてるような」（E教諭）状況になることが望まれている。

また、奨学金（金銭面）に関する情報以外にも、現地の生活や治安に関する情報も重要である。海外大学進学をめぐる保護者にとっての不安は、経済的なものだけでなく、現地の生活に関するものも多い。そういった情報も整理されると、保護者の不安は解消される。現状、教員としては、「我々は（現地の生活などについて）何も情報をもっていないので、大学に聞いてみるとよいですよ」（E教諭）と言うほかない。

さらに、IBスコアを入力すると、合格確率が一定以上の大学をリストアップしてくれるようなシステムもあつたらよいかもしれない。しかし、そのようなシステムは、IBの趣旨には反するかもしれない。また、そのようなシステムは実際に存在していると耳にするが、高額と聞くので、国公立の学校が導入することは難しい。日本の大学に対しては、合格に必要とされるIBのスコアを明示してくれるとよいと考えている。

### **3-2-4. 各事例の共通点と差異点**

I校、II校、Ⅲ校において、海外大学進学に対する思い（海外大学進学をどの程度IB履

修生に勧めているか)は異なっていた。しかし、3校の教員は皆、基本的に進路選択においては生徒自身の意思を尊重する姿勢をもっていた。この姿勢は、自立的な生涯学習者の育成を謳うIBの理念に通じるものである。

また、3校の教員からは、手探りで進路指導にあたっている様子も共通して語られた。日本のIB認定校の多くは、未だ、卒業生を送り出してきた経験を豊富に有するとは言い難い。B教諭は、進路指導に関する研修のニーズに言及したが、今後、日本におけるIBの普及を考える際には、教科の指導の研修に加えて、進路指導の研修もまた必要と思われる。

IB履修生の進路選択の阻害要因に関連しては、日本の大学に対して、IBを活用した入試を拡充してほしい、IBを活用した入試において合格に必要なスコアを明確化してほしいといった意見が聞かれた。特別選抜の拡大等が各大学に要請されるなかで、IBの活用のあり方についても、大学の入試担当者間で認識が広まり、議論が深まることが望まれる。

奨学金制度に関しては、II校、III校では、いくつかの改善提案が聞かれ、I校においても制度に関するより一層の周知の重要性が認識されていた。制度の充実と情報の適切な周知によって、海外大学進学を望んでいる生徒が、より多く、その希望を叶えられるようになると考えられる。

## 4. 研究課題3：国際バカロレア（IB）修了生調査—進学後の学習成果—

### 4-1. 調査の概要

本章では、研究課題3について検討する。

研究課題3：海外／日本の大学へ進学後、IB修了生は、IBを通じて育まれた能力やスキルをいかに活用しているか／伸ばしているか。

なお、本章で用いるデータは第2章と同様である。インタビューのプロフィールについては、表1を参照されたい。

### 4-2. インタビュー調査の結果

以下、海外大学に在学中のIB修了生と日本の大学に在学中のIB修了生がそれぞれ語った進学後の学び（IBを通じて育まれた能力やスキルの活用と伸長）について、記述する。引用の際、個人情報の特定につながる恐れのある箇所は、【】を付し調整を加えている。また、必要に応じて、（）を付し補足を加えている。

#### 4-2-1. 海外大学進学の場合—IBを通じて育まれた能力やスキルの活用と伸長—

まず、海外大学に在学中のIB修了生による語りを引用する。

海外大学に在学中のIB修了生は、IBの履修を通じて得たスキル等の大学における活用について、以下のように語った。

- ・ 「正直、IBをやっているときは特に感じてなかったんですけど、でも多分、事前にIBで鍛えられたなって感じているのが、IBの歴史とかTOK（知の理論）とか。自分の意見だけではなくて、自分と反対の意見もエッセイの中にも盛り込まなければいけなくて、それに対して反論もしなければいけなくてっていうのがあって。そこで、自分の意見をいろいろな視点からとりあえず見て、非がないかとかチェックするっていう習慣が比較的できたのかなって。IBが習慣を作ってくれたというか、基礎を築き上げてくれたのかなって感じています。」（G1さん）
- ・ 「レポートを書くのとか、レポートのときにサイテーション（引用）とかレファレンス（参考文献）とか入れるときに、私は普通だと思って大学のレポートでもやっていたんですけど、結構、同じ学部の子とかに聞いてみるとうちの高校ではこんなことやってなくて、全然分からないとか言っている子がいたので、そういうのはIBでやっていて楽にトランジションできたなっていうのは思います。」（G6さん）
- ・ 「大学に来てアサインメント（課題）が多くなって結構、言っている人いるんですけど、IBでそれぐらいはあったので、慣れちゃえばそういうのって楽じゃないですか。IBでも同じようなアサインメントとかたくさんあったので、同じような感じかな。」（G6さん）
- ・ 「暗記がメインだったんですよ、トルコの受験っていうのは。つまり、暗記のエキスパートの人たちが大学に入ってきて、暗記の本場である医学部で勉強するってなるので、めちゃくちゃすごいですね。自分は、暗記っていうよりも考えるっていうことに重きを置いたIBっていうシステムを経て医学部に入ったので、やっぱり暗記の仕方っていうのが他の人と比べて、あんまり効率が最初よくなかったと思うんですよ。でも、自分で周りの人たちに追いつくためにどうすればいいかっていうのを考えて自分なりに方法を編み出して、周りの人たちに追いついたっていう経験はIBっていうものに挑戦する経験がなければできなかったんじゃないかなと思います。」（G8さん）

- ・ 「EE（課題論文）とかすごく長い作文とか、リサーチペーパーをやらなければいけないので、大学に行ってからたくさん書くようになって、そういうのはとてもいい練習になったなって思っていますし、例えば自分から調べなければいけないという、自分の教育は自分でやるみたいなそういう方針も。大学に行ってから大きいクラスだったり授業のスタイルが全然、高校と違うなってすごくショックを受けたんですけど、先生にあまり質問する感じじゃないじゃないですか。聞いて後で先生、時間あったら聞きに行くみたいなスタイルだったので、それはちょっとびっくりしたんですけど。IBでももともとそういう考え方だったので、他のIBをやった子に比べては慣れてたかなっていうのはありますね。」（G9さん）
- ・ 「勉強量に関して、IB、最後らへんとかすごくきつかったんですけど、【所属大学】も休みとかが少なく。例えば冬休み、9月から12月が1学期で、2学期がちょうど1月7日から始まっちゃうんですけど、1週間ぐらいしか休みなくて。なのに夏、4カ月休みがあるんですね。そういう、冬の間全部授業やるみたいなスタイルなんですけれど。すごく忙しくて。IBもすごく忙しかったんですけど、それやってなかったらもっとストレスだったのかな、他の普通の高校のレベルとは違うなっていうのを感じますね。」（G9さん）
- ・ 「1番は英語で勉強するっていうのがIBで慣れたんで、そこが1番、活着ているかなっていうのは思ったりしますね。」（G10さん）
- ・ 「基本大学の1年生、イギリスだと結構高校のときに自分の専攻学科を既に学んでいる生徒が多いので、そういった意味では結構復習というか、新しいことももちろん学ぶんですけど、どちらかというと高校のIBとかAレベルとかで学んだ内容をきちんともう一度頭に入れるというレベルなので、すごく難し過ぎる訳ではないかなとは思っています。多分11年、IBとかそういう高校で学科を取ってなかった人でも学べるレベルに設定されているので、1年生は。私もいくつかの教科は既にIBでやっているものだったりするので、そういった意味では既に知っているレベルの教科もいくつかありますね。」（G11さん）

以上の語りから、海外大学で学ぶIB修了生は、自身の意見を相対化する視点（姿勢）（G1さん）、書く力（学術的引用の方法、長い文章を書く力等）（G6さん、G9さん）、課題解決力（G8さん）、自立的に調べ学ぶ力（G9さん）、重い学習負担への忍耐力（G9さん）、英語で学ぶ力（G10さん）、専門分野の知識（G11さん）などを、IBで身につけ、大学で活かしていると認識していると言える。

他方、G12さんは、以下に示すとおり、大学の学習の難易度の高さゆえに、IBの学習経験が活着ていると感じることは少ないという。

- ・ 「（大学の学習の）レベルは全然高いです。IBでは準備はできていなかったし。本当に1年生の1学期とかは苦労しました。勉強に関しては今も苦労していますけれど。ギャップにも、あと周りのレベルの高さにも。これまでやってきたことが全然。IBだとすごく忙しかったので、当時は。当時の考え方なので、今は幾らでももっとできたなと思いますけれど。当時は忙しかったので、IB以外のことをやるのがほとんどなかったんですけど。学校の勉強をして、IBの勉強をして、全て。時間を裂こうと思えば幾らでも、TOKとかEEとか、ずっとやっついようと思えばいられたので、他のことをやろうというところまで、頭が回らなかったんですけど。A-Levelとかをやってきた子たちは、A-Levelが楽な分、その他のことを自分で学んできているので。なの

で、大学の数学も見てきているし。ただ好きだから、自分で他のことをやってくるというのがあるので、その差を埋めるのは、時間の問題で、無理だなと思うことが本当にあります。なので、IB が大学に入ってから役に立ったってことは、正直ないです。」 (G12 さん)

それでは、IB で得たスキル等のさらなる伸長について、IB 修了生はどのようにとらえているだろうか。一般的に、IB は学問的に厳格なプログラムとして知られているが、G1 さんと G7 さんは、以下に示すように、現在の大学における学習状況をさらに厳しいものとして語っている。彼らは、大学における学びを通じて、重い学習負担への忍耐力をさらに伸ばし、また、効率的な学習の仕方などを新たに身につけていると考えられる。

- ・ 「基本的には、学習スタイルとしての IB と比較的変わらないかなと思うんですけど、読む資料が多い。大学になると、1 日に出される課題の量はとてつもなく多いので、どれぐらい読み物に時間をかけるかとか、じっくり読むところもあれば、スキミングっていうか、目を通すだけのところとか、強弱をつけながら勉強するっていうのはまだ、IB では鍛えられてなかったって思っていて、そこは、今も頑張っているところですよ。」 (G1 さん)
- ・ 「(大学進学後最も大変なことは) 日々の学習ですかね。うちの大学は結構ブラックで、有名で。休みも短くて、宿題とか勉強の量がすごく多いっていうので有名で。2 年生に上がれるのが 60 パー (%) だけなんです。1 年生から 2 年生に。40 パー (%) ドロップアウトで。」 (G7 さん)

また、日本の IB 認定校から海外大学へという経路を辿った G2 さんは、海外大学で学ぶことの意義を以下のように語った。

- ・ 「(大学進学後) アカデミック面でもすごく難しいし、課題もいろいろあって忙しいんですけど、もっと社会的に、友達をつくるか、文化に慣れるとか、そういう面でもすごく大変だったんですけど、今思えば、すごくいい刺激となっていて。例えば、1 年生のときには、アメリカの文化に慣れるのに必死で、僕はあまり、アメリカ人の友達ができなかったんです。そうすると、どうしても、アジア系の、同じような見た目の人たちと一緒に付き合っていて。でも、2 年生になったときに、徐々に大学にも慣れてきて、アメリカ人の友達とも、一緒に遊んだりすることが多くなって、それでいろいろなことを経験して、ですね。なので、そういうソーシャル的な面でも、すごくアメリカの大学ってすごく。日本の大学じゃ絶対経験できないようなことができたりとか。」 (G2 さん)
- ・ 「歴史を今学んでいるんですけど、いろいろな地域だったり、年代の歴史をやっていくなかで、最近では、日本史に興味をもち始めていて、日本史なんて、全く興味なかったんですけど、高校のときは。でも、ある種、アメリカに行って、日本史を学ぶ意義みたいなものが見つかったりして。というのは、客観的に日本の歴史を見られる、アメリカの視点ですけど。アメリカの視点から日本の歴史を学ぶってすごく面白くて、それは多分、日本で日本の歴史を学ぶのとは、全く違うことで。そういう新たな、違う視点から歴史を学んだりとか。あとは、方法論的にも、例えば、オーラルヒストリーっていう、インタビューを今、僕、今、皆さん (インタビュアー) がやっているインタビューを通して、歴史的な出来事を解明したりとか、いろいろな、アメリカが結構、トップを走っているような方法論的なものを学んだりとかしているのは、すごく面白くなっていうふうに感じています。」 (G2 さん)

以上の語りから、G2さんは、海外大学において、学問的な学びの深化や多様な人々との関わりを通じた社会的な面での成長を経験していると言える。

#### 4-2-2. 日本の大学進学の場合—IBを通じて育まれた能力やスキルの活用と伸長—

次に、日本の大学に在学中のIB修了生による語りを引用する。

海外大学に在学中のIB修了生に対して、IBの履修を通じて得たスキル等の大学における活用についてたずねたところ、活用の機会はあまりなかったという学生（G18さん）もいた一方で、以下のように、多くの学生が具体的な活用場面に言及した。

- ・ 「IBの経験が活かしている。例えば、実際、エッセイを書いたり、プレゼンとかすると違うかなって思います。周りと比較して、自分をあげる訳ではないですけど、私はこういう視点をもって、考えているけれど、多分、他の人はここまで考えてなかったっていうか、いろいろな角度から自分の考えをもつようになって、それを論理的に提示するってことはできているんじゃないかなっていうふうに思ったり。」（G3さん）
- ・ 「結構、レポートとか、実験とか研究の方向になってしまうんですけど、日本の高校を卒業された学生と比べると、やっぱり調べ物をたくさんIBでやっていたので、レポートとかのまとめ方もコピーだけをすとかではなくて、自分の言葉でまとめて。あと、参考文献とかの書き方も分かっているかなっていうふうに思っています。あと、日本の高校を卒業した学生と一緒にプレゼンをするときだとか、プレゼン能力とかもIBで磨かれたかなっていうふうに思っています。やっぱり、教授とか先生とかと話をしているけど、やっぱり、IBの学生は違うよねって感じでおっしゃってくださったりするので、自分がすごく実感していなくても、やっぱり身についた知識とかは活かしているのかなっていうふうに思います。」（G5さん）
- ・ 「（書く力について）やっぱりちょっと自分の日本語力に不安を感じているので、英語から日本語にもっていく段階で少し難しいと思っているので、そこまで役に立っているかはまだよく分からないんですけど。そういうふうな、考えて書こうとしているところまでは活かせていると思っています。」（G15さん）
- ・ 「私は、プレゼンがすごく好きで。好きっていうか、嫌いじゃないので。そういう場面では、プレゼンをするのに、別に、やりたくないとかって思うこともないですし。あとは、ディスカッションとかも、こう思われたらどうしようとかって思って、あんまりディスカッションできないみたいなことはないです。そういうのは、今までIBで散々ディスカッションとかプレゼンをやってきたっていうこともあるとは思っています。あとは、何に対しても、クリティカルシンキングができるっていうところは大きいと思います。教授が言ったことに、え、本当にそうなのとかって思って、自分で調べてみるとか、質問してみるとか。エッセイを書くにしても、でも、こういう考えもあると思います、とかって。それを鵜呑みにするんじゃなくて、じゃあ、どうなんだろうっていうふうに疑問視する力っていうのは、IBで培われてきて。それを、今、学んでいることをより深く理解するのに活用できているかなっていうふうに思います。」（G16さん）
- ・ 「（大学での学びは）全体的に、IBとの親和性はすごく高いと思います。それは、どの教科でもそうでした。例えば、生物の授業だとしても。日本の学校に行っていた方々が多いので。そしたら、高校までで暗記はもう終わりにして、大学からは考えるようにしようとか。化学とは何かを考えるようにしようっておっしゃられる先生がい

て。それはすごい TOK とかにも通ずるものだなんて思っていて。それは、驚きでした。」 (G16 さん)

- 「プレゼンテーションとかを、英語の練習としてやることがあるんですけど、そういうのも、一応何回か経験していたので、特に構えることなくできましたし、レポートも、日本語でレポートを書いた経験はなかったですけど、でも、レポートを書くっていう行為に抵抗をあまり感じなかったり、授業のスタイルじゃないですけど、たくさん学んだことを踏まえてレポートを書くっていうのが、日本の高校に通ったままでできてたかなっていう思いは、時々ありますね。テストじゃなくて、レポートで評価されるっていうのは怖い部分があるんですけど、それを経験していたのは大きいかなど。」 (G17 さん)
- 「(IB では) 理系の科目を取っていたんですけど、自分で考えると、自分で課題を発見して、自分でちゃんと考えるっていうのをずっと高校のときはしていて。ただ暗記するだけではなくて、本当に自分の言葉で説明できたりとかっていうのをずっとやっていたので、むしろ、そういった点では社会学じゃなくても、大学の授業を受けているときに、レポートを書いたりだとか、ゼミにしても習ったことを自分の中で発展させて違うものだったりとか、自分の意見にできたりとか、発展させられるっていうのが結構あったので。自分の中でそういうプラスの要素が強かったかなと思う。」 (G19 さん)
- 「レポートで文章を書かされるとか、文字数制限、最低何文字以上、何ワード以上っていうときでもひるまなくなっただけっていうのは結構大きいですね。やっぱり量を書かされていた分、いっぱい書く、もちろん内容も伴わないと意味ないですけど。いっぱい書いて、どうやって論理展開していけばいいかっていうのは、IB のエッセイの課題で鍛えられたなっていうのはあります。」 (G20 さん)

以上の語りから、日本の大学で学ぶ IB 修了生は、書く力 (学術的引用の方法、長い文章を書く力等) (G3 さん、G5 さん、G15 さん、G17 さん、G19 さん、G20 さん)、プレゼンテーション力 (G3 さん、G5 さん、G16 さん、G17 さん)、ディスカッション力 (G16 さん)、批判的思考力 (G16 さん)、課題発見力 (G19 さん) などを、IB で身につけ、大学で活かしていると認識していると言える。

それでは、IB で得たスキル等のさらなる伸長について、日本の大学に在学中の IB 修了生はどのようにとらえているだろうか。

日本の大学に在学している IB 修了生からは、以下のとおり、IB で得た知識やスキル等を必ずしも進学後に伸ばせていない状況が語られた。

- 「正直、一番簡単なクラスを、例えば、歴史の一番基礎みたいな授業とかを受講したときに、IB の歴史とか、TOK と被るところがいっぱいあって。そういうのはちょっとつまらないな、物足りないなっていうことを、1 年生のときは結構、感じていました。」 (G16 さん)
- 「IB の教育ってディスカッションはもちろんするんですけど、結構、一つに絞って、がーってディスカッションして、すごく集中的に深く学べるっていうのがあるんですけど、今の大学がどうディスカッションっていうことを捉えているのかは分からないんですけど、何でもいからディスカッションしろ、それがディスカッションだみたいなふうに捉えられると、困るなとか。ディスカッションっていうのは一つのテーマに対してみんなでより深く掘っていけるためにする手段であって、ディスカ

ッションをただ単純に、淡々とすることにはあまり意味がないとされていて。なので、表面的なところをみんなでちょっと話ただけじゃ、全然、その効果っていうのが出てないっていうか。」 (G3 さん)

- ・ 「アカデミックな書き方っていうのは、高校時代に、結構、修得できたのかなって思っていて。でも、それを高校生のときに一定程度のことは修得できたけれど、大学でそれをさらに深められる質の授業を受けているかって言われると、そうでもないなっていうのはあります。」 (G3 さん)
- ・ 「日本の【所属大学】に入って、良くなったこととか、自分がより成長できているなっていう実感は、今のところ正直言うとなくて、なんか大学の講義を受けて成長するっていうよりは、自分で課外学習とかをしないと足りないかなっていうふうに感じています。」 (G5 さん)

しかし、日本の大学に在学中の IB 修了生が皆、知識やスキル等の伸長に満足していない訳ではない。例えば、G4 さんは、以下のとおり、自身が身につけている書く力やディスカッション力の大部分は IB を通じて育まれたと認識しているものの、自由に考える力は日本の大学で学ぶことによって身につけられたと考えている。また、日本の大学における新たな学問分野との出会いについても肯定的にとらえている。

- ・ 「(書く力やディスカッション力について) 正直に言うと、IB のときのほうが、伸ばせていたのかなっていうふうには思うんですけど。大学に入って、いろいろな意味で自由が増えたっていうふうには、私的には思っていて。例えば、レポートを書くにしても、どのくらいの量を書くのかとか、どのくらいの参考文献を使うのかとかって、完全に個人次第じゃないですか、大学って。別にそれで、クオリティーが低くても、それはもう自分の責任だしみたいな感じのところはあるので。そういったなかで、自分なりに参考文献とかを集めたりして、レポートの量も、多く書いてっていうのをやってきたので、そういうところでは、自由にもっと考える力とかは、IB にいたときよりはついたのかなっていうふうには思います。単純に今まで習ったことがない、経済とか、経営とか、そういうのは本当に IB では習ったことがない分野だったので、そういう授業とかも、今学期とか取ったりとかして、新しい学問領域に触れたことっていうのは、結構、大きいかなっていうふうには。」 (G4 さん)

さらに、新たな学問分野との出会いや、多角的な視点の応用についても、G19 さんや G14 さんによって以下のとおり語られた。

- ・ 「知らないことでもすごく興味をもって、ちゃんと勉強できるというか、ちゃんと何事にも興味をもてるっていうのは、すごく大学のなかで伸びたのかなと思っていて。インターというか、IB では確かに自分で考えているっていう力はずけられたんですけど、結構、科目も限られていましたし、6 科目だったので、限られていましたし。IB とはいえ、高校の一環の授業だったので、自分がすごく全く知らない分野の勉強を自分がしなきゃいけないっていうことはなかったの。その中で【所属大学】の授業を受けているときに、シラバス見て取ったはいいものの、中身、全然、思っていたものと違ってたっていう授業が結構あったんですけど。社会学部だったので、本当に幅広い分野の学問を扱っているの、そういうことがあったんですけど。でも、それでも結構、授業を聞いていてすごく面白いなっていうのを自分のなかで感じるものが結構、多かったの。そういう幅広い学問を扱っている学部でいたことによって、初めて学ぶ分野の学問であっても、結構、知らないし、興味ないから嫌だなんて思うより



も、これ知らないけれど面白そうだなっていうマインドをもつことができたっていうのは、大学で結構、得た力かなと思いました。」（G19さん）

- ・ 「リベラルアーツっていろいろなものを取れるっていうところが、いいところだなって思うんですけど、最近、特に、自分の中で何かに興味があるっていう軸があって、それに対して、いろいろなアプローチから見るとっていうのがリベラルアーツなんだろうなっていうふうに思っていて。そこがすごく IB での学びにつながっているというか、とっていて、私は、英語教育にすごく興味があって、英語教育を見るときに、国際関係との関連性を授業の中で見い出せたりとか。あとは、異文化コミュニケーション的な観点から、英語教育とのつながりを発見できたりとかすることがあるので、そういうのっていうのは多分、IB のおかげなのかなっていうふうに感じています。主に、授業内が多いですね。」（G14さん）

日本の大学で学ぶことの意義に関しても、以下のとおり、学習にかかる負荷の相対的な低さが、自己に向き合う時間の確保につながるという語りが聞かれた。

- ・ 「日本の大学って、あまり忙しくないっていうこともあって、今回のコロナのこともあって、割と、自分、何を求めているかっていうことに自分を問う時間ってというのが、日本の大学だとかこういう時間も与えてくれる、そういう環境が整えられているからメリットはあります。」（G3さん）

以上、本章では、研究課題3について検討してきた。一部の学生を除き、多くのIB修了生は、学びの場が海外大学であっても日本の大学であっても、IBの履修を通じて得たスキル等の活用を実感していると言える。とりわけ、書く力に関しては、多数のIB修了生がIBで身につけ、かつ大学における学びへの円滑な移行を促したものとしてとらえている。

他方、IBで身につけたスキル等の伸長については、海外大学に進学したIB修了生と日本の大学に進学したIB修了生との間で、差異が見られた。海外大学の場合、IBに比した際の大学における学びの負荷の大きさを語ったIB修了生が複数いた（G1さん、G7さん、G12さん）。彼らは、大学において、IBで身につけた重い学習負担への忍耐力をさらに伸ばしたり、あるいは、新たに専門的知識やスキル（効率的な学習の方法）などを獲得したりしている典型的な例ととらえられる。日本の大学の場合、進学後のスキル等の伸長に関しては、物足りなさを感じている様子のIB修了生が散見された。しかし、自由な発想で考える力を新たに身につけたととらえているものや多様な学問分野との出会いを大学において経験できたと語ったものもいた。

海外大学で学ぶ意義に関して、日本のIB認定校から海外大学へという経路をたどったG2さんからは、学問的な深化に加えて、多様な人々との関わりを通じた社会的な面での成長が語られた。他方、日本の大学で学ぶG3さんからは、自身に向き合う時間が確保されていることが、日本の大学のメリットとして語られた。G2さんやG3さんの意見が、どれほど一般化可能なものか、本調査をもって断言することは難しい。しかし、彼らの語りから、進路選択においては、海外大学/日本の大学の特性、および、自身が大学に何を求めるかをそれぞれ踏まえた上で意思決定をすることがきわめて重要であると言えるだろう。

## 5. 終章

### 5-1. 研究成果

研究成果として、IB 履修生の進路選択に関して以下 4 点を述べる（研究課題 1 に対応）。

第一に、岩崎（2007b）による、日本の大学の教育内容に対して「その教育内容の劣悪な評判」という表現を用いながらも、「過去の消化と未来に向けた充電」のために日本の大学への進学を選択した IB 修了生が存在するという指摘と類似の結果を、本稿でも得られた。換言すると、心理的安定を求めて、負荷が相対的に低いと認識している日本の大学への進学（それに伴う日本での居住）に至る IB 修了生が存在している。しかしながら、負荷が低い（あるいは学問ではなくサークル活動等が中心になる）と日本の大学が認識されることは、反対に日本の大学ではなく海外大学へ進学しようという動機を強化する側面ももつ。今後、日本の大学が学問的熱意に満ち溢れた学生を獲得しようとするのであれば、大学生活の中心が学問にはないといったイメージを払拭する必要がある。

第二に、小林による指摘、すなわち、「高校生活の前半時点で海外の大学を志望しながらも最終的には国内の大学へと進学した層は（中略）海外で学位を取得するために長期間日本を不在にする長期留学よりも、日本国内の大学に進学した後に語学研修や交換留学等の制度を利用して短期留学を実践することにより、『グローバルな文化資本』と『ローカルな文化資本』の両方を獲得する」（小林 2019: 25）という合理性を求めているのではないかという指摘は、本稿の結果に拠れば、支持される。なぜなら、日本の大学に進学後に留学の機会が確保されていることを、日本の大学へ進学した理由として挙げた IB 修了生を複数確認できたからである。事実、「海外と日本、両方いいとこ取りができたんじゃないかなって考えています」（G13 さん）という語りには象徴されるように、交換留学によって「いいとこ取り」ができた自身の大学生活を振り返ったインタビューがいた。このことを踏まえると、学士課程段階における海外への長期留学を促進することを望むのであれば、日本の大学における留学機会の拡充はマイナスに働く可能性がある。

第三に、オープンキャンパスやサマーキャンプは、特に海外大学への進学を目指すきっかけになり得る。今後、学士課程段階での海外への長期留学の促進を目指すのであれば、海外大学の環境に、短期間でも、より多くの高校生が触れる機会を確保することが有用であると言える。加えて、以下の指摘が重要である。

- ・ 「もっといろんな社会人の方と話す機会、実際にアメリカの大学を出て、社会人になっている方と話す機会があったらというのはすごく思っ。大学生だとか卒業して数年みたいな方だと、やっぱり本当に短期的な視点でしか語ってくれないので。この大学が、GPA がとか、ここの大学はいろいろな授業が取れるからって言われたって、いろいろな授業、取れるから何なのみたいなところが、教えてくれないじゃないですか。あたかもいいみたいな、知ったかぶりじゃないですけど。しょせん 2、3 年、上の人に聞いたところで、何も分からないっていうのはあって。だから、もっと 10 年、20 年、30 年と、大学を卒業して社会人として経験を積まれている方に、お話が聞ける、アメリカの大学卒業生の方に聞く機会があったら。もっと、後悔はしてないんですけど、現段階では、もうちょっと柔軟な志望校選びができたかなっていうふうに思いました。」（G10 さん）

すなわち、海外大学の卒業生に、長期的な効果を発信してもらうことは、日本の大学や海外大学を含めて、幅広い選択肢のなかからより適切な進路を選択する助けになるかもしれない。

第四に、やはり海外大学の学費の高さ（日本の大学の学費の相対的安さ）は、日本の大学志向を高める。海外大学進学を促すためには、奨学金制度の拡充が不可欠である。また、オランダの大学に在学中の IB 修了生が確認されたが、オランダは、比較的授業料が安価で

かつ英語プログラムが実施されている国の一例と言える。安価に英語で学べる国（大学）に関する情報を整備することで、経済的な理由によって海外で学ぶことを断念する若者の減少につながられると思われる。

次に、IB 認定校における教員による進路指導に関する研究成果を述べる（研究課題 2 に対応）。IB 履修生に対する高校における進路指導体制に関しては、国内外を問わず課題が多いと言わざるを得ない。日本の IB 認定校の教員は、試行錯誤で進路指導にあたっている様子を語った。また、高校における進路指導や進路に関する情報提供が必ずしも充分でなく、孤軍奮闘せざるを得なかった経験は、海外の IB 認定校出身者からも、日本の IB 認定校出身者からも語られた。偏差値といった一元的な尺度に基づく進路選択に比して、国内外を視野に入れた進路選択には特有の複雑さが伴う。そのなかで、自身に適した大学を見極め、そこに進学するためには、適切な情報収集と、多くの場合には経済的なサポートが必要となる。仮に、経済的なサポート（奨学金制度）がより充実したとして、情報の周知がなされなければ、そのサポートを必要とする生徒がアクセスできず、海外大学進学への促進にはつながらない。また、経済的なサポート等を活用して、進学がかなったとしても、進学前に自身の適性に関する省察や大学（学部）の特徴に関する検討をおろそかにすると、進学後の学習に対する満足度は低くなり得る。IB 修了生のなかには、後期中等教育段階の生徒は自立的に情報収集すべきだと語ったものもいたが、IB の学習と進学をめぐる情報収集との両立の困難を語ったものもいた。本調査を通じて、IB 履修生がより望ましい進路を実現するためには、高校における進路指導の充実が必要ではないかということ提案したい。

最後に、IB 修了生の進学後の学習成果に関する研究成果を述べる（研究課題 3 に対応）。IB 修了生の多くは、海外大学／日本の大学という場を問わず、代表的には「書く力」といった IB を通じて育まれた能力やスキルを、大学進学後に活用できているととらえている。他方、本調査から、IB を通じて育まれた能力やスキルの伸長に関しては、海外大学／日本の大学間で差が見られた。例えば、日本の大学に在学している G3 さんは、大学入学後のディスカッションのあり方に関して表層的ではないかという疑問を呈しており、こうした意見は日本の大学教育のあり様を批判的に問うているのではないだろうか。

## 5-2. 今後の課題

今後の課題として、以下 2 点を述べる。

第 1 に、インタビュー参加者の偏りに照らすと、日本の IB 認定校出身者を対象とした追加の調査によって、知見の一般化可能性が高まると思われる。具体的には、表 1 にあり、本稿におけるインタビュー参加者の多く（15/20 名）は、海外の IB 認定校の出身であった。また、日本の IB 認定校出身者も全員、後期中等教育段階までに何らかの海外経験をj得ていた。今後、日本における IB の普及・拡大がさらに進んでいくことを見通すと、例えば、後期中等教育段階までに海外経験を有さず、IB の履修を含め一貫して日本で教育を受けてきたような IB 修了生を対象として、彼らの進路選択の様相をとらえることは、有意義な知見の生成につながると思われる。

第 2 に、本稿では、具体的な進路指導のあり方の提案をするまでには至らなかった。本稿の知見を受けて、そのあり方を検討することは、今後の課題としたい。

## 引用参考文献

- 岩崎久美子 (2007a) 「在学生調査—ディプロマ・プログラム受講前から卒業まで」『国際バカロレア 世界が認める卓越した教育プログラム』明石書店、72-98.
- 岩崎久美子 (2007b) 「大学との接続調査—ディプロマ取得と大学入試」『国際バカロレア 世界が認める卓越した教育プログラム』明石書店、99-127.
- 岩崎久美子編 (2018) 『国際バカロレアの挑戦—グローバル時代の世界標準プログラム』明石書店.
- 岡村郁子 (2017) 『異文化間を移動する子どもたち—帰国生の特性とキャリア意識』明石書店.
- クレスウェル、J. W.・プラノ クラーク、V. L. (2010) 『人間科学のための混合研究法 質的・量的アプローチをつなぐ研究デザイン』(大谷順子訳) 北大路書房.
- 小林元気 (2019) 「高卒後の進路における海外大学進学志向の規定要因」『日本高校教育学会年報』26(18)、18-27.
- 渋谷真樹 (2016) 「国際バカロレアにみるグローバル化と高大接続—日本の教育へのインパクトに着目して—」『教育学研究』83(4)、423-435.
- 高崎朋彦 (2013) 「海外進学の研究」『研究紀要／東京学芸大学附属高等学校』(50)、71-78.
- 渋谷真樹 (2016) 「国際バカロレアにみるグローバル化と高大接続—日本の教育へのインパクトに着目して—」『教育学研究』83(4)、423-435.
- 永山賀久 (2013) 「グローバル人材育成と国際バカロレアについて」『化学と教育』61(7)、330-333.
- 三戸親子 (2001) 「総合学科における生徒の進路意識形成」『教育社会学研究』第 69 集、103-123.
- リクルート (2009) 「特集 高校進路指導現場の困惑 リクルート『高校の進路指導に関する調査』」『カレッジマネジメント』155.

資料（アンケート調査単純集計、インタビューガイド等）

【巻末資料1：国際バカロレア修了生（大学生）対象アンケート調査単純集計】

回答件数：N=38

Q1. 性別

1. 男性 N=11 (28.9%)
2. 女性 N=26 (68.4%)
3. 無回答 N=1 (2.6%)

Q2. あなたの年齢を教えてください。

年齢	人数	割合
18歳	5	13.1
19歳	13	34.2
20歳	8	21.0
21歳	5	13.1
22歳	3	7.8
23歳	4	10.5
総数	38	100.0

Q3. あなたの出身の高校についてもっとも当てはまるものを教えてください。

学校種	人数	割合
1. 日本の高校（公立）	2	5.2
2. 日本の高校（私立）	2	5.2
3. 日本国内のインターナショナルスクール	1	2.6
4. 海外の現地校	2	5.2
5. 海外の日本人学校	0	0.0
6. 海外のインターナショナルスクール	31	81.5
総数	38	100.0

Q4. あなたの出身の高校名を教えてください。

省略

Q5. あなたは現在、海外の大学と日本の大学のどちらに在学していますか、教えてください。

1. 海外の大学に在学している N=13 (34.2)
2. 日本の大学に在学している N=25 (65.7)

Q6. あなたが現在在学している大学名を教えてください。

省略

Q7. あなたが現在所属している学部・学科を教えてください。

省略

Q8. あなたが進学した大学は、第何希望でしたか。

志望順位	人数	割合
第1志望	28	73.6

第2志望	5	13.1
第3志望	3	7.8
第4志望	1	2.6
無回答	1	2.6
総数	38	100.0

Q9. あなたの現在の学年を教えてください。

学年	人数	割合
Gap Year	1	2.6
大学1年	15	39.4
大学2年	9	23.6
大学3年	8	21.0
大学4年	4	10.52
大学5年	1	2.6
総数	38	100.0

Q10. あなたはなぜIBDPを履修しようと思いましたか。該当する項目全てを選択してください。（複数選択可）

履修理由	人数	割合
海外の大学進学を希望したから	11	28.9
高校において英語による授業を多く受けたかったから	8	21.0
IBの教育の方法や内容に関心があったから	16	42.1
その他（1番最初に合格をもらったから／親からのアドバイス／UWCのカリキュラムがIBだったため必然的に履修しました。／イギリスの高校はGCSEの取得を前提としており、受けていなかったためインターナショナルスクールしか選択肢はなかったため／それ以外の選択肢を考えず、また選択余地もなかったため／海外で育ったから／IBよりも先にUWCに興味を持った方／行っていた高校がIB校だったため／高校で大半の生徒が履修していたから／受験で有利になると思ったから／日本の大学受験のため／高校のほぼ全員が履修していて、履修するのが当たり前だったから。／高等学校で履修が必須であったから。／国際バカロレア入試で受験するため／周りがとっていたから／難しいと聞いており、自分自身への挑戦になると感じたことと、感じたことと、海外生活の集大成になると思ったから。／日本のトップ大学の受験資格のため	17	44.7
総数	—	—

(N=38)

[海外の大学に在学しているIB修了生への質問]

Q11. あなたは高校入学時から高校卒業時にかけて、進路希望に変更がありましたか。

1. 高校入学時から高校卒業時にかけて、一貫して海外の大学への進学を希望していた  
N=9 (69.2)
2. 日本の大学への進学を希望していたが、海外の大学への進学を希望するようになった  
N=4 (30.7)

Q12. 以下の項目のうち、あなたが海外の大学への進学を希望した理由としてあてはまる項目を全て選択してください。（複数選択可）

海外大学志望理由	人数	割合
外国語（非日本語）で教育を受けたかったから	9	69.2
海外で（日本よりも）質の高い教育を受けたかったから	10	76.9
自分には、日本の教育よりも、海外の教育の方があっていると思ったから	8	61.5
海外で生活したかったから	6	46.1
IB の成績や経験を活かして入学試験を受けたかったから	9	69.2
授業料が安価だから	2	15.3
奨学金が充実しているから	0	0.0
親にすすめられたから	2	15.3
将来、海外で就職したいから	8	61.5
その他	0	0.0
総数	—	—

(N=13)

Q13. 以下の項目のうち、海外の大学への進学を希望するにあたって、あなたが高校生のときに心配していたことや不安に思っていたことを全て選択してください。（複数選択可）

海外大学進学不安	人数	割合
英語力（その他外国語力）に不安があった	3	23.0
IB の成績に不安があった	4	30.7
海外の治安や差別に不安があった	2	15.3
授業料や生活費の確保に不安があった	6	46.1
奨学金に関する情報が不足していた	6	46.1
海外の大学への進学に関する情報が不足していた	6	46.1
IB ディプロマの資格を用いて受験できる大学が少なかった	3	23.0
特に心配や不安はなかった	4	30.7
その他	0	0.0
総数	—	—

(N=13)

[日本の大学に在学している IB 修了生への質問]

Q14. あなたは高校入学時から高校卒業時にかけて、進路希望に変更がありましたか。

1. 高校入学時から高校卒業時にかけて、一貫して日本の大学への進学を希望していた  
N=12 (48.0)
2. 海外の大学への進学を希望していたが、日本の大学への進学を希望するようになった  
N=10 (40.0)
3. その他 N=3 (12.0%) (高校入学時は特に何も考えていなかった／最後の最後まで日本の大学か海外の大学か悩んでいました。／日本→海外→日本とかなり迷った)

Q15. 以下の項目のうち、あなたが日本の大学への進学を希望した理由としてあてはまる項目を全て選択してください。（複数選択可）

日本の大学志望理由	人数	割合
日本語で教育を受けたかったから	8	32.0
日本で（海外よりも）質の高い教育を受けたかったから	2	8.0
自分には、海外の教育よりも、日本の教育の方があっていると思ったから	4	16.0
日本で生活したかったから	16	64.0
IB の成績や経験を活かして入学試験を受けたかったから	8	32.0
授業料が安価だから	19	76.0
奨学金が充実しているから	1	4.0
親にすすめられたから	4	16.0
将来、日本で就職したいから	10	40.0
その他（日本の大学の海外提携校が良かったから／志望する分野について母国でまず学ぶことが重要だと考えたから。）	2	8.0
総数	—	—

(N=25)

Q16. 以下の項目のうち、日本の大学への進学を希望するにあたって、あなたが高校生のときに心配していたことや不安に思っていたことを全て選択してください。（複数選択可）

日本の大学進学不安	人数	割合
日本語力に不安があった	5	20.0
IB の成績に不安があった	6	24.0
日本での差別に不安があった	3	12.0
授業料や生活費の確保に不安があった	1	4.0
奨学金に関する情報が不足していた	0	0.0
日本の大学への進学に関する情報が不足していた	10	40.0
IB ディプロマの資格を用いて受験できる大学が少なかった	9	36.0
特に心配や不安はなかった	6	24.0
その他（はじめは海外の大学に進学しましたが、いろいろな事情があって日本の大学に編入しました。日本の大学受験を経験した同期と(知識量など)互角にやっつけていけるか心配でした。／TOEFL iBT のスコアに不安があった)	2	8.0
総数	—	—

(N=25)

Q17. あなたは大学入学後に海外留学を経験していたり、予定したりしていますか。

留学経験	人数	割合
海外留学を経験しておらず、今後する予定もない	10	40.0
短期留学を経験した。あるいは、今後予定している	3	12.0
長期留学を経験した。あるいは、今後予定している	8	32.0
短期留学と長期留学を両方経験した。あるいは、今後両方を予定している	2	8.0
その他（経験していませんが、してみたいです。／	2	8.0



今後してみたいと思う)		
総数	25	100.0

[高校在学時に進路希望に変更があった（日本の大学→海外の大学）IB 修了生への質問]

Q18. あなたはなぜ進路希望を、日本の大学から海外の大学に変更しましたか。その理由やきっかけを教えてください。（自由記述）

省略

[高校在学時に進路希望に変更があった（日本の大学→海外の大学）IB 修了生への質問]

Q19. あなたはなぜ進路希望を、海外の大学から日本の大学に変更しましたか。その理由やきっかけを教えてください。（自由記述）

省略

[全員]

Q20. IB の学習で、あなたの進路選択のきっかけになったことはありますか。あるいは、あなたが進路を考えるうえで、IB の学習がいかに影響を与えましたか。ご自由にお答えください。（自由記述）

省略

Q21. IB 履修生がより良い進路選択を実現するために、どのような支援や制度改善が必要と考えますか。ご自由にお答えください。（自由記述）

省略

【巻末資料2：国際バカロレア修了生（大学生）対象インタビューガイド】

国際バカロレア（IB）履修生に対する進学支援の在り方に関する研究  
質問項目

調査時期：2020年〇月×日

調査場所：オンライン（Zoom）

調査対象者：国際バカロレア（IB）修了生 X 様

調査実施者：菊地かおり（筑波大学）、江幡知佳（筑波大学大学院）

調査目的：本研究の目的は、日本の国際バカロレア（International Baccalaureate: IB）認定校における IB 履修生、並びに、日本の／海外の大学に在学している IB 修了生を対象として、彼らがいかなる過程で進路意識を形成してきたかを明らかにすることである。このことを通じて、IB 履修生に対する望ましい進学支援の在り方を検討する。

調査時間：約 1 時間／1 人

質問項目：

1. これまでの学校歴について

1 これまでの学校歴を教えてください（就学前段階、初等教育段階、前期中等教育段階、後期中等教育段階、現在）。

2. 高校時代に IB を選択した理由について

1 IB 認定校に進学した理由を教えてください。また、いつ頃、なぜ、IB の履修を決定しましたか、教えてください。

2 IB の履修を選択したことを後悔したことはありますか。もし後悔したことがあるのであれば、それはなぜですか、教えてください。

3. 大学進学希望について

1 現在在籍している大学（XX College）を含めて、志望（出願）大学をどのように決定しましたか、また、どのようなことを期待して、進学先を選択しましたか、教えてください。

2 高校在籍時に、大学進学希望の内容が変わったことがありますか（例：以前は米国以外の大学への進学を希望していたが、米国の大学への進学を希望するようになった、等）。もし希望の内容が変わったことがあるのであれば、いつ頃、どのように変わりましたか、教えてください。（※日本の大学として想定されていたのは日本語によるプログラムか？英語によるプログラムか？）

3 あなたが進路を考えるうえで、IB の学習がいかに影響を与えましたか。例えば、「知の理論（Theory of Knowledge: TOK）の学習を通じて、〇〇学部を志望するようになった。なぜなら……」のように、できるだけ具体的に教えてください。

4. 進路選択の際に感じた困難とそれをどのように乗り越えたか

1 以下の項目のうち、高校在学時のあなたの進路選択において、困難と感じていたものがあれば、教えてください。あわせて、その困難をどのように乗り越えたか（乗り越えられなかったか）を教えてください。

- ・ 金銭面、奨学金制度
- ・ 入試に関する情報収集
- ・ 語学力

- ・IBの科目選択
- ・その他

#### 5. 高校での進路指導について

- 1 高校在籍時に、いかなる進路指導を受けましたか（高校からの働きかけで、留学フェアなどに参加することはありましたか）、教えてください。

#### 6. 保護者や先輩・友人の進路選択への影響について

- 1 これまでに、保護者から、進路についていかなる助言等がありましたか、教えてください。
- 2 進路選択に際して、先輩や友人から影響を受けることはありましたか、教えてください。

#### 7. 塾や予備校、家庭教師等の利用について

- 1 高校在籍時に、塾や予備校、家庭教師等を利用していましたか、教えてください。
- 2 これまで、塾や予備校、家庭教師等の利用を通じて、あなたの進路意識に影響を与えられた経験があれば、教えてください。

#### 8. 自身の進路選択に対する評価について

- 1 あなたは、現在在籍している大学へ進学してよかったと考えますか（進路選択に満足していますか）、また、入学前に抱いていた期待は満たされていますか、教えてください。
- 2 自身の進路選択（大学選択）について、後悔していることがあれば、教えてください。

#### 9. （海外の大学在学者向け）大学での学習経験について

- 1 大学でのおおよその学業成績を教えてください（GPA、あるいは、上位・中位・下位など）。また、大学における学習の難易度をどのように感じているかを教えてください。
- 2 大学在学中に、どのような場面でIBの履修経験が活きていると考えますか、また、どのような場面でIBで得た能力を伸ばせていると考えますか、教えてください。
- 3 現在、大学での学習を進めるうえでの困難があれば、教えてください。
- 4 海外の大学で（海外で）学ぶ意義をどのようにとらえているかを教えてください。

#### 9. （日本の大学在学者向け）大学での海外経験・学習経験について

- 1 大学在学中に得た、あるいは得る予定の海外経験（短期留学、長期留学、その他）の内容を教えてください。
- 2 国内大学に進学された理由として、「国内大学に進学しても短期留学・長期留学ができること」がどの程度当てはまりますか、教えてください。
- 3 大学でのおおよその学業成績を教えてください（GPA、あるいは、上位・中位・下位など）。また、大学における学習の難易度をどのように感じているかを教えてください。
- 4 大学在学中に、どのような場面でIBの履修経験が活きていると考えますか、また、どのような場面でIBで得た能力を伸ばせていると考えますか、教えてください。
- 5 現在、大学での学習を進めるうえでの困難があれば、教えてください。

#### 10. 奨学金の仕組みについて

- 1 奨学金の仕組みについて、何かご意見があれば教えてください。

## 【巻末資料3：国際バカロレア履修生（高校生）対象インタビューガイド】

### 国際バカロレア（IB）履修生に対する進学支援の在り方に関する研究 質問項目

調査時期：2021年〇月×日

調査場所：オンライン（Zoom）

調査対象者：国際バカロレア（IB）履修生 Xさん

調査実施者：菊地かおり（筑波大学）、江幡知佳（筑波大学大学院）

調査目的：本研究の目的は、日本の国際バカロレア（International Baccalaureate: IB）認定校におけるIB履修生、並びに、日本の／海外の大学に在学しているIB修了生を対象として、彼らがいかなる過程で進路意識を形成してきたかを明らかにすることである。このことを通じて、IB履修生に対する望ましい進学支援の在り方を検討する。

調査時間：約30～40分／1人

質問項目：

#### 1. これまでの経歴について

- 1 これまでの学校歴を教えてください（国公立の別、など）。
- 2 これまで、海外に滞在したことがありますか。もし滞在したことがあるのであれば、どの国に、いつ頃（どのくらいの期間）滞在されていたかを教えてください。

#### 2. IBを選択した理由について

- 1 IB認定校に進学した理由を教えてください。また、いつ頃、なぜ、IBの履修を決定しましたか、教えてください。
- 2 IBの履修を後悔したことがありますか。もし後悔したことがあるのであれば、それはなぜですか、教えてください。

#### 3. 大学進学希望について

- 1 現在、大学への進学を希望していますか。もし希望しているのであれば、希望の具体的な内容（例：海外／国内大学への進学を希望している、〇〇（国）の大学への進学を希望している、日本の国公立／私立大学への進学を希望している、具体的に××大学への進学を希望している、等）を教えてください。
- 2 いつ頃、どのような経緯で、3-①でお答えいただいたように大学進学を希望するようになりましたか、教えてください。
- 3 これまでに、大学進学希望の内容が変わったことがありますか（例：以前は海外大学への進学を希望していたが、現在は国内大学への進学を希望している、等）。もし希望の内容が変わったことがあるのであれば、いつ頃、どのように変わりましたか、教えてください。
- 4 あなたが進路を考えるうえで、IBの学習がいかに影響を与えましたか。例えば、「知の理論（Theory of Knowledge: TOK）の学習を通じて、〇〇学部を志望するようになった。なぜなら……」のように、できるだけ具体的に教えてください。

#### 4. 進路選択に関して感じている困難

- 1 以下の項目のうち、あなたの進路選択において、困難と感じているものがあれば教えてください。あわせて、必要とする支援などがもし思いつきましたら、教えてください。
  - ・大学進学にともなう授業料や生活費の確保、奨学金制度

- ・入試に関する情報
- ・語学力
- ・IBの科目選択
- ・新型コロナウイルスの影響
- ・その他

**5. 高校での進路指導について**

- 1 これまでに、あなたの所属する高校において、いかなる進路指導を受けてきましたか、教えてください。

**6. 保護者や先輩・友人からの進路に関するはたらきかけについて**

- 1 これまでに、保護者から、進路についていかなる助言等がありましたか、教えてください。
- 2 これまでに、進路選択に際して、先輩や友人から影響を受けることはありましたか、教えてください。

**7. 塾や予備校、家庭教師等の利用について**

- 1 現在、塾や予備校、家庭教師等を利用していますか、教えてください。
- 2 これまで、塾や予備校、家庭教師等の利用を通じて、あなたの進路意識に影響を与えられた経験があれば、教えてください。

## 【巻末資料 4：国際バカロレア認定校進路指導担当教員対象インタビューガイド】

### 国際バカロレア（IB）履修生に対する進学支援の在り方に関する研究 質問項目

調査時期：2021年〇月×日

調査場所：オンライン（Zoom）

調査対象者：国際バカロレア（IB）認定校にて進路指導を担当する X 先生

調査実施者：菊地かおり（筑波大学）、江幡知佳（筑波大学大学院）

調査目的：本研究の目的は、日本の国際バカロレア（International Baccalaureate: IB）認定校における IB 履修生、並びに、日本の／海外の大学に在学している IB 修了生を対象として、彼らがいかなる過程で進路意識を形成してきたかを明らかにすることである。このことを通じて、IB 履修生に対する望ましい進学支援の在り方を検討する。

調査時間：約 30～40 分／1 人

質問項目：

#### 1. これまでの経歴について

1 これまでの教員としての経歴や経験年数を教えてください。

#### 2. 御校における IB 履修生に対する進路指導について

1 御校の IB コースにおける進路指導の方針の概要を教えてください。

2 御校では、IB 履修生、および IB の履修を検討する高校 1 年生等に対して、いかなる進路指導を行っていますか、教えてください。

- ・ IB の履修を検討する高校 1 年生等（場合によっては、IB の履修を検討する中学生を含む）
- ・ 高校 2 年生
- ・ 高校 3 年生

3 これまでに、御校の IB コースにおいて、進路指導の体制や方法に変更・改善を加えられたことがあれば、教えてください。

4 御校では、IB コースにおいて、どのように進路指導担当教員と各教科担当教員が連携しながら進路指導に当たられていますか、教えてください。

5 御校では、どのような生徒に IB の履修を勧めますか。また、御校では、IB を履修する生徒に対する選抜の基準がありますか、教えてください。

#### 3. 進路指導の課題について

1 これまでに、海外大学進学を希望する生徒に対する進路指導に関して、御校ではどのような課題が生じてきましたか、（また、その課題をどのように乗り越えましたか／乗り越えようとされていますか）教えてください。

2 これまでに、国内大学進学を希望する生徒に対する進路指導に関して、御校ではどのような課題が生じてきましたか、（また、その課題をどのように乗り越えましたか／乗り越えようとされていますか）教えてください。

#### 4. IB 履修生の進路選択の阻害要因について

1 以下の項目のうち、IB 履修生の進路選択において、阻害要因になっていると考えるものがあれば、「どのように阻害されていると思うか（どのように生徒が困っているか）」を教えてください。

- ・大学進学にともなう授業料や生活費の確保、奨学金制度
- ・入試に関する情報
- ・語学力
- ・IBの科目選択
- ・新型コロナウイルスの影響
- ・その他

5. IB履修生の進路選択・進路実現に向けた支援や制度改善について

- 1 IB履修生が希望する進路の実現のために、どのような支援や制度改善（入試制度、奨学金制度など）が必要と考えますか、教えてください。

## 謝辞

本調査研究の遂行にあたりご協力をいただきました、株式会社トモノカイ、IB 修了生の方々、IB 認定校の先生方に深く感謝の意を表します。